
COBALT-SERIES
前田珠子
天使狩者
緑風に誘われ
集英社

COBALT-SERIES

天を支える者

緑風に誘われ

前田珠子



集英社



COBALT-SERIES

天を支える者

緑風に誘われ

前田珠子

集英社

目　次

天を支える者　緑風に誘われ
緑風に誘われ……7
あとがき……191



ガスカール

ナルレイシアの護衛を命じられた青年公爵。クールな性格で、ことナルレイシアに対して手厳しく、口を開けば毒舌ばかり。

ナルレイシア

「不幸中の幸いの権化」というありがたくない異名を持つ本好き少女。柱神さまを見きわめる「選定者」でもある！

物紹介



スカルトード

超絶美形の青年にして、とある柱神さまの縁者でもある。ナルレイシアとは「本の虫同盟」の絆で固く結ばれている。

ウォルセン

良家の子息だが、理由あって家出中。手先の器用さを活かしてなんとか生計を立てている。女装で追っ手をまいているが…？

登場人

イラスト／明咲トウル

緑風に誘われ

ある日。
突然世界が変わった。
眠っている内に連れて来られた場所は見知らぬ処(ところ)で、触れあう人たちもこれまで会ったことのないひとたちばかりで。
混乱し、困惑する自分に、けれど彼らはわけのわからない要求だけをつきつけてくる。
約束を果たせと——。
救いを示せと——。
本当に、わけがわからない。
困惑しているのに、自分よりよほどに大きな彼らは、ひたすらに同じ言葉を繰り返すだけなのだ。
約束を果たせと——。
救いの地はどこなのだ、と——。
わけのわからないことばかり問いただされた。

「知らない、知らない、そんなこと知らない！」
いくら叫んでも、彼らの追及は已まなかった。
まるで、『彼』が答えを知っていると確信しているかのように――否、知っていなければおかしいとでも言うように。
知らないのに。
彼らの求める『答え』など、自分が持っているはずもないというのに。
……なのに、彼らは求め続けるのだ。知らぬ答えを問われつづける自分がどれほど疲弊するのか、そんなことは知ろうともせずに。
「違うのに……僕は約束の地なんか知らないのに……」
皆が、自分にそれを求める。
違う、といくら言っても、誰も聞いてはくれない。
理由は、ある。
あるからこそ、やりきれない。一族中が信じている伝説の刻印が、この身に刻まれているからこそ、誰もこの自分自身の声を聞こうとは思わないのだ。
みんな、自分の言葉など求めていない。
周囲が望むのは、自分と同じ『徴』を持っていた、とても偉いご先祖さまたちと同じような

卓抜した存在で、その方々がもたらした一族に対する恵みで……つまりは、同じ事を、一族に利する言葉を欲しているのだ。

けれど、そんなことはいまの自分とは関係ない。

本当に、『約束の地』なんか知らないし、連れて行けと言われても困るのだ。

けれど、いくらそのことを訴えても、誰も聞いてはくれなくて——。

疲れて。

自棄になって。

最後は諦めた。

生きている限り、家族の元へも帰れず、答えられない問いを投げかけられるだけだというのなら、その時間をなるべく短くすませるほうが楽に違いない、と。

……本当に、彼は疲れ切っていたから、そうすることはさして難しくはなかった。

与えられるものを受け取らなければ済むことだったから。

水も食事も、摂らずにいたらそのうち体が受け付けなくなったから、彼らの要求から逃げ切るのは時間の問題だと思っていた……そう、あの瞳に出会うまでは。

それは、美しい、美しすぎる翡翠の双眸——。

『どうして?』

と、至高の輝きを瞳に宿す子供が、自分に向かって問いを放つ。
『どうして、食べないの？』
狡い、と思った。
その瞳を前にして、その声を耳にして、答えずにはいられなかったから。
気付けば、堪えていた不満をあらかたぶちまけていた。
『約束の地なんか知らない！　なのに、みんな、そんな筈はないって言うんだ！　知らないものは知らないのに！』
翡翠の瞳を持つ子供は、彼の言葉にうんうんとうなずいた。
そうして、約束してくれた。
『じゃあ、君の代わりに僕が探してあげる。だから、君はきちんとご飯を食べて、元気になって？　……そうして、ぼくの友達になって……？』
不安に揺れる翡翠の眼差しに、気づけば彼はうなずいていた。
『うん』
『約束？』
『うん……約束』
それが生涯に渉る誓約となることを、ふたりとも知らずに――誓いは交わされた。

プロローグ

（まったく最低……！）

今年二度目の家出の失敗に伴い、連れ戻された自室の状態の凶悪さに、最早ため息を洩らすしかない状況で、部屋の主たる青年は、ふうぅ、と深い息をつきつつ頭を抱えた。

部屋の内面を覆うのは、複数の結界術師によるそれ――鍵となる人物の付き添いなしには、一歩たりとも外には出られない。

精霊たちの気配は遠い。

これは、一般の人間にはない第六感が発達していることにより、精霊たちからの好意を得ている自分に対する警戒ゆえの施術だ。

なにがあろうと、この屋敷の住人たちは、自分を外に出すつもりはないのだ。

その理由もわかっているだけに、なおさら嘆きは深くなる。

（あいつは……違うと思うけど……）

幼なじみの青年の顔を思い出しながら、彼はふう、と息をつく。
大切な幼なじみ――自分としては親友と呼んでも差し支えないと思っている存在。
けれど、それはあくまで自分にとってであって、対外的には両者の立場は違いすぎる。だから……そう、自由に互いに顔を見ることもできずにいる。
ここ数日、また熱を出して寝込んでいるらしいと、家人たちの気配から知った。
（大丈夫なのか？）
心配でたまらない。
けれど、この軟禁状態にあっては、見舞いすらできやしない。
同じ敷地内に、今も熱を出して苦しんでいる幼なじみがいるというのに……見舞いはおろか、その様子さえ知ること……否、求めることさえできない現状には嫌気どころか嫌悪感を抱くしかない。
（それもこれも……）
元凶たる『徴』を刻まれた己が左の二の腕に目をやり、青年は唇を噛みしめた。
（こんなものがあるせいで……っっ！）
呪詛にも近い怒りが湧き上がる。
その『徴』があったがゆえに、自分は家族から引き離された。

その『徴』があったから、周囲から重すぎる期待をかけられ、それゆえに縛りつけられた。なにもかもが、この腕にある『徴』のせいだ。

（こんなものを生まれついて持っていたせいで……っ！）

袖をまくって見る気にはなれない——事あるごとにむき出しにされ、人目にさらされたそれの色彩も形状も、すでに脳裏に刻みつけられているのだから。

（くそ……ぅ……）

きつく目を閉じ、しかし『徴』を憎みきることも出来ない自身を、改めて思い知る。

思い……知らされる。

その『徴』なくして、親友と呼べる唯一の青年との出会いはあり得なかったことを知るがゆえに。

けれど、それすらも呪いの一環なのだとも思えて、彼は息をつくしかない。

ただひとつだけ、はっきりとわかっているのは、このままではいけないということ。だが、唯一自分の言葉に耳を傾けてくれる親友が病床にある今、誰も自分の意志など気にも掛けやしないのだ。

なんという皮肉だろう。

（それでも……このままでは……）

破滅への階を一歩ずつ上っている自覚があるだけに、彼の焦燥は強まるばかりだ。
（早く、しないと……）
可能な限り――一刻も早く、自分はここから離れるべきなのだ。
そうして、周囲の勝手な思惑から無縁な存在にならなければ――そうしなければ。
待っているのは破滅だと、視えているのは恐らく自分ひとりではない。
しかし、それを口にするのは、自分であってはならないというのに、他の誰も、口火を切ろうとさえしてくれないのだ。
（いっそ、跡形もなく消え失せてしまえるなら、それに越したことはないのに……）
自死という手段を考えたこともあった。
だが、それはあまりにも影響が大きすぎて選べぬ道だった。
望む未来はあまりに遠く、容易い逃げ道も塞がれて――ならば、せめて誰かが動いてくれたら……そう思ったけれど。
それすらも、この分では望めそうにない。
八方塞がりだ。
出口が見えない。
最早、どうしたらいいのか、自分でもわからない。

（誰か……）

すでに、他者に望みを託すことさえ無意味だとわかっているのに、それでも救いを求めてしまうのは、心の弱さゆえだろうか。

それとも……人間の性として、逃れられない道なのだろうか。

（誰か……）

無意味なことだ——そうわかっていても、願う思いは止められず、そんな自分の心の在りように、思わず自嘲の笑みを唇に刻みかけた……正にその時。

……天が、動いた。

自分のために、天が……神々が動いたなどと自惚れるほど、彼は自らに対して無知ではありえなかった。

だが、それが唯一絶対の好機であることに気づけぬほど、彼は現在の状況に対して鈍感でもなかった。

本来音さえ通さない、精霊たちの接触を完全に排除するべく張り巡らされた幾重もの結界が

ぴしりと音を立てて崩壊する。
開放される聴覚――視界もまた同然で、突然開けた光溢れる世界に、彼は痛みとともに歓喜を覚えた。
見える。世界が。
聞こえる。世界に響き渡る音が。
それは、この部屋を含めた空間から、結界という名の幕が取り払われた何よりの証だ。
「……なにが……!?」
思わず窓に駆け寄り、遮光性の高いカーテンを思い切り開いたその先……窓の外に。
繰り広げられている信じがたい光景を目にした瞬間、彼は生まれて初めて神の存在を実感した。
空に向かい、身をうねらせる黄金の竜の姿――。
それは黄神の真の姿であるはずだが……今の彼にとって、それが真実であろうがまやかしであろうが関係はなかった。
重要なのは、今この時、あの竜がこの地に姿を顕したということ。
それにより、自分を拘束していた様々な力が無効化し、結界もまた揺らいでいるという……
それだけだ。

（今しかない）

と、彼は確信し、同時にそのために動くことを選び取った。

自由と未来を勝ち取るために――。

彼は、これまで許されなかった最初の一歩を踏み出した――。

1

大陸中央部最大の大国と呼ばれるディエーン王国の首都ロスタロイド――。
その巨大な街の『西区』と呼ばれる地区を、ひとり歩く少女の姿があった。
なんとも艶やかな金の長い髪は、ふたつに分けられ独特な形に結い上げられ、その一部は結われることなく垂らされている。
どうやら東方のある地方に伝わっているという独特な髪型であるのだが、似合っているだけに周囲の目を引きはするものの、奇異なものを見る視線に晒されることはない。
透き通るような白い肌にはしみひとつなく、バラ色の頬の描く曲線は世の少女が理想に思い描くそれと一致する。
楊枝を乗せても落ちなさそうな、長く綺麗にカールした睫毛に縁取られた瞼の奥に輝くのは最高級の黄玉に勝るとも劣らぬ色彩と輝き。
細く、長い首。まろやかな曲線を描くしなやかな肢体に加え、そこから伸びる四肢はどこま

でものびやかで瑞々しい。

唇は、さながら摘み取られるのを待つばかりの桜桃――。

……つまるところ、誰の目にも明らかに、一人歩きなどさせられない――というか、させたくないという、とびっきりの極上の美少女だった。

だが、しかし。

この地区にあって、彼女が異端視及び危険に遭遇する可能性はない。

なぜなら、この『西区』多くの職人が工房を構える地区では、すでに彼女は常連客と見なされているからである。

腕の良い職人が集まっていることで知られるこの西区――常連と住人たちに認めさせるのはなまなかなことではないが、街全体があっさりと彼女のことをそう認めているのは確たる事実だ。

それは彼女の容姿が住人達を魅了したせい……などではなく、彼女の人柄とその抱え込んだ深い知識、さらには彼女の後見人とされている人物――すべてが尋常でなかったせいである。

「ナーシア、珍しく手ぶらだなぁ。もしかして書物の修繕を頼みにきたのかい？」

手漉き紙の工房に勤める男から気安くかけられた問いかけに、『ナーシア』と呼ばれた少女――ナルレイシア・フォイリリル・ダカールは、にっこり笑顔で応じる。

「そうなの。ナリア旦那の工房にね。結構な稀覯本なんだけど、綴じ糸は弱ってるし、ページのあちこちは虫に食われてるしで、わたしができる応急処置では追いつかなかったものだから……ああ、その関係で、補強用の紙の注文が入るかも。その時はよろしくー」

「おう、任せとけ！　ところで、ファティ・リンシャにはお変わりはねえのかい!?」

下町気質というか何というか――つまるところ、一度身内と認めたら、とことん受け入れてしまう傾向にある西区の住民が、ナルレイシアをあっさり受け入れたのは、彼女の雇い主が特別な存在であったせいなのだ。

ファティ・リンシャ。

銀の髪を上品に結い上げた初老の女性は、このロスタロイドにあって知らぬ者はないと言われる有名人である。

魔法屋敷と呼ばれる不思議の館――不思議のタネは精霊たちの篤き加護である――の女主人は、その気さくな人柄と、困ったひとを見過ごせず、救いの手をさしのべるという素晴らしい美質ゆえに、ロスタロイドの人気者である。

元々は他国のひとだったのだが、ロスタロイドに移ってからの二十年ほどの間に、すっかりこの地に馴染んでしまったのだと聞いた。

そんな老婦人の屋敷に住み込むことになったナルレイシアに対し、ロスタロイドの住人たち

は最初から好意的だった。彼女自身、気さくな性格の主である上に、職人技には惜しみない賞賛の声を上げることもあり、職人街と呼べる西区において、彼女の人気もまた高い。

「お元気よ。ガス……じゃない、公爵さまがあんまり口うるさく心配するものだから、内緒でどこかに出かけようかしら、なんて軽口を叩いてらしたぐらい。あんまり『足腰も弱ってらっしゃるのだから』と繰り返されて、うんざりなさったみたいよ。公爵さまも、ねえ……ファティ・リンシャのことが心配なのはわかるけど、あんなに口うるさく注意ばっかり口にしてたら、鬱陶しがられるってことぐらい、わかりそうなものなのにねえ」

問題の『公爵さま』については、結構……かなり辛辣な口調になってしまうのには理由があるから致し方ない。

少女とその『公爵さま』との間には、広くて深い溝があるのだ。

それは、何度も目にしたふたりのやりとりで、住人たちにも周知の事実だった。だがしかし、彼らの認識が少々事実からずれているというのは紛れもない現実で。

「まあまあ、公爵さまにとってはファティ・リンシャは親御さん同然の大切な御方なんだし、それでちょっとナーシアにきつい言葉を吐いちまうのだって、それだけあんたに心を許してる証拠なんだしさ、大目に見てやりなって」

台詞の前半部分は、言われるまでもなくわかっていることだったから、なにも反論する気は

起きないが……後半部分に関しては、是非とも一言もの申したいところだった。

ファティ・リンシャが関わると、ロスタロイドの住人は途端に甘くなる。

それは彼女に気に入られ、屋敷に住み込むようになったナルレイシアにはありがたく働いた効果だったが、同じように、それは彼女が今ひとつ好意的関係を築けずにいる人物に対しても同じことが言えるのだ。

その人物とはエルスカーネ公爵ガスカール。

黒髪に紫の瞳という、今のファラスース王家に取って代わられる前の王家――エルスース家――の直系の特徴を色濃く受けて生まれてきた青年公爵。

前王家の復活を恐れた一味にか、逆に前王家復活の鍵として彼を求めた一味にか――首謀者は未だ明らかになっていないが、そうした政治的思惑と陰謀によって、幼いころに両親であるエルスカーネ公爵夫妻を暗殺という最悪の事態で喪い、心身ともに傷ついた彼を、保護し癒した数少ないひとのひとりが、ファティ・リンシャだった。

おかげで、かの青年公爵のファティ・リンシャに対する傾倒ぶりは凄いものがあるが……それに関してはナルレイシアとしても理解できないことはない。

だが、問題は――だ。

ファティ・リンシャ第一の彼にとって、自分は厄介者以外の何物でもないという認識が確立

されてしまっていることだ。

まあ……生まれて以来、どうしたらここまで、と周囲が首を傾げるほどの頻度で厄介事や事故に巻き込まれ、何度も何度も——最早数えられないほど、生死の境を彷徨う羽目に陥ってきた『不幸中の幸いの権化』の異名を取る自分が、大切な養い親同然の女性のそばにいることを懸念する気持ちはわからないではない。

我が身に置き換えて考えても、大切なひとのそばに、ひっきりなしにトラブルを招き寄せる爆弾のような人間がいるとなれば、排除したいと思わずにはいられないだろうから。

だが、だがしかし、である。

（ことあるごとに「出て行け！」はないと思うのよね。うー、そりゃあ、色々騒ぎに巻き込んだあげく、迷惑かけちゃった自覚はあるけどぉ……でも、そのどれひとつだって、わたしが進んで起こしたものじゃなかったんだし……それを、あいつったら、ねちねちじくじく厭味ったらしく、いつまでもいつまでもっ！）

せめて、あの皮肉攻撃を半分に減らしてくれたら、きっと関係は少しは良好化すると思うのだが、今のところ、その兆しは見えない。

（なんでわたしばっかり？）

譲歩しなければならないのか——とは思ったが、口には出さない。

ロスタロイド住民における贔屓度は、来てからようやく一年のナルレイシアより、この街で生まれ育ったガスカールに対するもののほうが格段に高いことを知っているせいである。

「はは……まあ、努力します」

乾いた笑顔で応じた時のこと。

「ヴィル・ダカール！」

自分を呼ぶ、認めた瞬間、陶然としてしまうような美声が耳に飛び込んできた。

振り向くまでもなく、相手を確定する。

こんな声で自分を呼ぶ人物の心当たりは、実のところふたりしかなく、その内ひとりが現在このロスタロイドにいないことは明白であり、そうである以上、思い当たる人物はひとりしかいなかったからである。

ナルレイシアは一度深呼吸し、視界の衝撃に耐えるべく心の準備をした後、ゆっくりと振り向いた。

問題の相手は、声もさることながら、視覚的衝撃が尋常でないからである——もっとも、『もう一人』と顔も声もそっくりなものだから、相対する際に必要な心の準備は同じであるわけだけれど。

振り返り、予想した人物の顔を認めたところで、ナルレイシアは腹部に力をこめた。

（どうか……声が震えませんように）

祈るように思いながら、彼女は声を掛けてきた相手の名を口にした。

「スカーさん……」

「ああ、やっぱり、ヴィル・ダカールだ」

嬉しそうな――輝くばかりの笑顔で近付いてくるのは、緑がかった金髪と、灰緑色の瞳を持つ、はっきり言って同じ人間とは思えない水準の美貌を誇る青年だった。

スカルトード・ナネリーアン・フォスカリク――ディエーンの北部に位置するガライラ大公国出身のこの青年は、ナルレイシアにとっては恩人であると同時に、得難い同志でもあった。

彼女がこのロスタロイドを初めて訪れて間もなく、酔漢にぶつかり転んだせいで頭を打って昏倒したところを、拾って介抱してくれたというのが出会った切っ掛けだったのだが、さらに親しくなった理由は、互いの嗜好の一致があったから――だったりする。

その嗜好とは――。

「いいところで会えました！　実はいい本を見つけたんですよ」

灰緑色の双眸を、きらきらと輝かせながら、自慢げにナルレイシアの目の前に晒すのは――傍目にもわかる、なんとも分厚い上製本だった。

ただし、目に楽しい装丁ではなかった。

表紙の装丁の一部は破損しているし、タイトルの箔押しも大部分が剝がれている。状態がいいとは、お世辞にも言えないその上製本を、スカルトードはまるでふたつとない宝物であるかのように握りしめていた。

「マギル・レヴィンの『蓮華草の咲く中で』の第三版を見つけたんです！」

「なんですって!?」

耳にした言葉に、ナルレイシアの声は綺麗に裏返った。

「マギル・レヴィンの『蓮華草の咲く中で』って、確か当時の政治批判を窺わせる内容だからって、第四版以降、勝手に政府が検閲入れて削除しまくった作品ですよね!?　ええっ!?　それの第三版!?　ってことは、もしかして原文そのまま!?」

ナルレイシアの目もまた、きらきらと輝いていた。

「ええ、そうなんです！」

人とは思えぬ美貌の青年が、抑えきれぬ歓喜の念によって、更にその美貌度を上げる――しかし、通常であれば、目にしただけで魂が抜かれるようなその輝きを前にしようと、それ以上に魅力的な存在を示されたナルレイシアは無頓着で……それどころか、青年ほどではないとはいえ、十二分に整った顔に満面の笑みをたたえ――周囲の人間の魂を根こそぎ奪いながら――陶然とした表情を浮かべた。

「……『蓮華草の咲く中で』の原文……」

本人、自覚はないが、そのうっとりした声を耳にした者は、思わず彼らふたりに目を向けたあげく、しばらく金縛りにあうという被害を被った。

しかし、自らの歓びに浸っている当事者のもう片方も、周囲のことなど気づかぬ様子で、同じようにうっとりと繰り返すのだ。

「そうなんです……原文なんです……」

「神さまに感謝しなくちゃ、ですね」

「もちろん、神さまに感謝しますとも……こんな貴重な本が、偶然立ち寄った古書店などで見つかるだなんて……ああ」

「わかります、わかります、スカーさん」

いいかげん、「このひとたち、なにかに酔ってる?」と疑われてもおかしくない様子で、しかし当人たちは気にする様子もなく、件の書物を手に入れたことを喜び合っている。

……そう。

人に在らざる美貌としか言いようのない青年スカルトードと、人外とまでは思わないものの、客観的に見てとびきりの美少女であるナルレイシアは——。

活字中毒という、あまり一般的でない、強い、強い絆で結ばれた『同志』だったのである。



2

絶える事なき神々の守護を得し、永き繁栄を約束された国――ディエーン。
その首都ロスタロイドの一画において、こぢんまりとした屋敷の女主が、後に特大の爆弾となる騒ぎのきっかけとなる言葉を口にしたのは、午後の茶会でのことだった。

「今度、昔なじみの友人が、子孫……じゃない、縁者を訪ねてファエンに来ることになったらしいの」
茶会の出席者は、一見上品な初老の貴婦人にしか見えないこの女性の一言に、ぴきりと緊張を露わにした。
発言者は、銀髪を優雅に結い上げた、薄紫の双眸も穏やかな初老の女性だ。

当然『昔なじみ』の友人も、似たような歳の、老境にさしかかっているだろうひとだろうから、縁者を訪ねてディエーン王国南西部に位置するファエンに来ると懐かしそうに彼女が語っても、ちっともおかしなことはなかった……表面的には。

まあ、ちょっとは彼女の台詞に、おかしいと言えないところがないでもなかったけれど、出席者のだれも、そのことに追及の手をのばさなかった以上、問題なしと言えるだろう。

「本当に久しぶりのことだから、会いたいわねえという話になってね。ファエンは温泉地でもある事だし、ゆっくり過ごせるわねとか話していたら、どうもねえ、お喋りな風霊がその事を触れ回ってくれたらしくて……」

苦笑まじりに、老婦人があらぬ所――明らかに、誰もいない空間――に目をやりながらそう続ける。

「なんだか、いつの間にか、ファエンにみんなが集まることになったらしいの」

そろそろ、常識を逸脱した話題になってきた。

（ファティ・リンシャ……普通の一般人は、いくら風霊が騒ぎまくったって、その気配にすら気づけませんって）

つまり、風霊の声を聞いて、その内容を理解して、しかも足を運ぼうなどと思う存在など限定に限定を重ねられたような存在ばかりだということで。

そんなのは、結局のところ、普通の人間とは少しばかり違う感性を持っている特殊能力者だったり、そうした感覚を持っていて当たり前の特殊な存在だったりするわけで。

表面こそ取り繕ってはいるものの、同席している面子のなかで、一番異常事態に免疫のない——と、認識しているのはもしかしたら本人ひとりかもしれない——ナルレイシアは、内心だらだらと冷や汗を流しながら、どこからどう突っ込んでいいのかわからなくなって、ぐるぐる状態に陥っていた。

（やだーっっ！　そんな人外もしくはびっくり人間博覧会にだなんて立ち会いたくなーいっっ！）

言葉に出したなら、ひどい言い種だと非難されること請け合いの内容だが、そう思わずにいられない理由がナルレイシアにはある。

それというのも、目の前で優雅にティーカップを傾ける老婦人の正体が、世界の天と地との間——『空』を支える役目を負った『柱神』と呼ばれる神の一員であるからであり、更にはナルレイシア自身、そんな神々と無関係とは言えない役目を押しつけ……もとい、負った存在だったりするからである。

柱神——それは、この世界を創造した虹神と呼ばれる七人の神により、神籍を与えられた者たちの呼称だ。

強すぎる力をたたえるがために、創造したこの世界に直に降り立つことのできない創世神たちが、自分たちの代わりに世界を支える柱となるべく選んだ――人間として生まれた者たち。

そうなるべく導く神宝に選ばれ、人間から神に生まれ変わった者たち。

かつては百八を数えていたという御柱は――今では半数近くに減ってはしまったが、その存在は消え失せてはおらず、今も世界を支え続けてくれている。

ファティ・リンシャは――ナルレイシアの雇用主にして、孫娘同然に彼女を可愛がってくれる老婦人は、まさにそれなのだ。

そんな彼女の『友人』や『昔なじみ』が……しかも風霊の噂話を知覚できるような存在が、ごくごく普通で当たり前な人間である可能性など、まず皆無だ。

だから、ナルレイシアは絶対に絶対に、その『お出かけ』にだけはご一緒したくないと思ってしまったのである。

その理由は……まあ、三つばかり。

ひとつは、自分がとんでもないトラブル体質であること。

生まれてこれまで十七年、退屈を覚えたことがないぐらい、彼女は災難と災難と災難に囲まれて生きてきた。

生まれ育ったフィレアは、結構な田舎であったはずだというのに、なぜか物心つく以前に攫

われたことが何度かあったらしい、とは家族から伝え聞いただけだから実感は湧かないのだけれど。

物心ついて以来も、かなりひどい目にはあったと思う。

初めての海に感動する間もなく、高波に攫われ、生死の境を彷徨うような大怪我を負ったりとか、山に行ったら散策中に突然鉄砲水に襲われたりとか、土砂崩れに呑み込まれて窒息死寸前に掘り起こされたとか、すぐ近くで落雷にあい、やっぱり生死の境を彷徨ったりだとか。

命の危険がなかった件もあわせたら、枚挙に暇がない。

おかげで故郷では『不幸中の幸いの権化』などという、ありがたいのかありがたくないのかわからないふたつ名の方が、本名より知れ渡っていたりする。

そんな……とことんトラブルを引き寄せる体質の自分がだ。世界を支えるような方々と触れあって……そこで、なにも起こらないはずがない——と思うのは穿ちすぎだろうか？

いいや、気のせいではないと、ナルレイシアは信じている。

それというのも、二つめの理由が、柱神と呼ばれる存在に非常に密接しているからだ。

……二つめの理由。

それは、ナルレイシアが空座となっている——つまり、半身たる柱神を喪った神宝が新たに選び出す相手……つまりは新たな柱神を見極める役目を負っていることだ。

選定者、とその役目を負う者は呼ばれる。
その呼称ゆえに、その人物が新たな柱神に相応しい人物を選ぶのだと誤解されがちなのだが、実際のところは違う。
選定者は、神宝が半身に選んだ相手を正確に見極め、神宝と新たに神に選ばれた者との絆を結びつける——橋渡しをするだけなのだ。
だが、やはり呼び名のせいか、誤解する者は後を絶たない。
選定者こそが、新たなる柱神を選ぶのだと——勘違いする者達は多く、おかげで多大な被害を被ったのは、一年ほど前のことだ。
そのせいで、攫われたり麻薬漬けにされかけたり殺されかけたり……思い出すのもいやになるほど散々な目に遭わされたのだけれど。
それでも、なんとか無事に『選定』を終えて、ようやくお役目からも解放されて、後は幸福なファティ・リンシャの屋敷の書庫に籠もって読書三昧の日々が——とか、思っていたのに。
あれだけ苦しい思いをしたのだから、これぐらいのご褒美は貰えるだろうと信じていたというのに、だ。
藁にも縋る思いで紡いだ願いは……叶えられなかった。
ナルレイシアの『選定者』としての役目は、終わっていなかったのである。

現人神の一員である老婦人からもたらされた、無情な言葉は忘れられない。

『ナーシアは、これからまだあと三人の柱神を見極めなければならない、大事な身体ですものね』

その言葉を最初に耳にした時、はっきり言えば、理解できなかった。

いや、その言葉の意味するところを受け入れたくないばかりに、理解することを拒んでいたかもしれない。

それでも——どれほど逃げだそうとも、そこが現実である以上、問題は残されたままであり、課題は未消化のまま、目の前に置かれている。

そう……死んでもおかしくないぐらいに大変な目に遭いながら、ようやく果たした『お役目』が、実のところ、あと三度……。

（つーまーりー、同じような騒ぎと危険に見舞われる可能性が、あと三回は確実にあるということなのよね……？）

自分で答えを出しながら、そのあまりな内容に、ナルレイシアは思わず泣きそうになった。

……全然、嬉しくない。

そんな事情と生来の体質を鑑みるだに、今回のこのファティ・リンシャが持ち出してきた話題は危険すぎる。

（絶対に、大騒ぎになる！）

確信できてしまうあたり、なんとも切ないけれど……でも、ナルレイシア自身としては、ひたすら平穏な日々を熱烈切望中なのだ……過去、その願いがかなった例がなかったとしてもである。

（やだ、絶対にやだ。君子じゃないけど、危ないってわかりきってるとこになんか、近付きたくないーっっ！）

心の底からそう希求するナルレイシアは、だから一番の安全策に逃げ込もうとした。

つまり――。

「ファティ・リンシャ、どうぞ楽しんで来て下さいね。わたしは留守を守ってますから……」

魔法屋敷の女主を送り出し、自分はこのロスタロイドで待機する。

そのつもりだったのだ。

が、しかし、だ。

いい加減付き合いも深まり、こちらの性格も把握されてしまった上で、渡り合うにはファティ・リンシャという女性は手強すぎた。

「まあ、なにを言うの、ナーシア!?　みんな、あなた見た……いえ、あなた会いたさに集まるようなものなのに、肝腎のあなたが来なくてどうするの!?」

（わたし見たさに……って、言いかけた……）

真実お世話になっているし、心から大切に思ってもらっていることもわかっているけれど、ファティ・リンシャが根っからの面白がりであるのも事実なものだから、ナルレイシアは純粋に素直に、この老婦人の言動を信じることができなくて……切なくなる。

「……ファティ・リンシャ……。わたしは、平凡で平穏な日常を愛しているんです」

最後の足掻きとばかりに、切実なる思いを口にしたナルレイシアであったが……彼女自身すでに予感していた通り、その願いは通じなかった。

「ええ、わかるわ、ナーシア。ひとは、時として現実にはあり得ない理想郷を求めるものですものね。けれど、現実は現実として、きちんと見据えなければ。あなただって、いつまでも課題を先延ばしにしていても無意味だということはわかっているでしょう？」

にこやかに、しかしきっぱりと、ナルレイシアの――ささやかな――希望を摘み取って、彼女は宣言した。

「先の騒動からかれこれ一年……そろそろだと思うのよ？　だったらここは攻めて行きましょう、ね？」

「だから！　そっち関連の問題については、近付きたくないんですって！」

必死の抵抗も、意味はなかった。

「まあ、ナーシア。こと、厄介事に関してはね、逃げれば逃げるだけ、騒ぎは大きくなるだけですよ？」

やんわりふんわりの笑顔で、現在、世界中で最年長にあたるであろう女性は、無情にも言い切ってくれた。

トラブルに巻き込まれることに慣れっこになってしまった十七年の人生で、ナルレイシアが学習したことのひとつに、移動する場合、荷物は限りなく少なく――というものがある。

旅行にしろなんにしろ、絶対何らかの事故に遭うのは、すでに確定事項となっている彼女は、そうした場合の大荷物が邪魔にしかならないことを骨の髄まで思い知らされている。そうして泣く泣く諦めた荷物のなかに、命の次ぐらいには大切だと断言できる書物が含まれていたことは言うまでもなく、だから彼女は移動する場合、本だけは荷物に詰めないことを心に決めていた。

が、しかしである。

（今回はわたしひとりじゃないし、ファティ・リンシャのために馬車で移動するって話だし、

それだったら、一冊ぐらい……ううん、二、三冊なら持って行っても平気かも……）

なにしろ、目的地であるファエンは南の国境近くにある街だ。

馬車でも二十日はかかる。その移動中に読書に勤しんだところで、罰は当たらないと思うのだ。

「……んー、あんまり重くない本なら、邪魔にもならないだろうし……」

いいわよね――自分に言い聞かせながら、ナルレイシアはいそいそと書棚に近付いた。

と、そのとき。

「いいわけがあるか」

不意に背後から掛けられた不機嫌そうな声に、彼女はびくん、と肩を震わせた。

半ば開かれた扉の向こうに、黒髪の青年が佇んでいる。

ガスカールだ。

「なによ、仮にも女性の部屋の扉を勝手に開けるなんて……！」

非礼を詰るナルレイシアに、しかしガスカールはふん、と鼻で笑う。

「確かに『仮にも女性の形態の主』の部屋だからな、礼儀に則って、何度かノックさせてもらったが、一向に返事がない。こうした場合、どうすればよかったと思う？」

ぐ、と詰まったナルレイシアである。

それが本当なら、確かに彼を責められない。責められない……が。

現在自分は、荷造りの最中なのだ。小振りの鞄の口は開いたまま、詰め込まれた衣服や小物が見えている。いくらなんでも、そんな様子は見られたくはないではないか。

「……せめて、声をかけるとか……」

「かけたが、返ってきたのが鼻歌まじりの足音だったんだが？」

今度こそ、ぐうの音も出ない彼女である。

（ううぅ……分が悪いわ）

確かに、持って行くならどの本にしようかと、楽しい悩みに頭がいっぱいだったのは認めるが……それにしても、声をかけられたことにも気づかなかったとは大失敗だ。

「えー、あの、それは……悪かったわ。でも、ひとの荷物の中身にまで文句をつけないでちょうだい。なにもこのお屋敷の書庫からお借りして持っていくわけじゃないんだから」

正真正銘、自分の持ち物である本を持っていくのだ――口出しされる筋合いはないはずだ。

そう思っての言葉に、しかしガスカールは厭味たらしく肩をすくめた。

「もしものことが起こった時、お前はどうせ未練たらたらで本に執着するだろうが。そのせいでファティ・リンシャの身に何かあったら困る」

もしも――などと言いながら、彼の紫瞳には、それを確信している光があった。

（こいつ……騒ぎが起こると信じてるわね。そりゃあ、わたしもかなりの確率でそうなるだろうとは思ってるけどっ！　だからって、こいつに言われるとむかつくわね。こいつが心配してるのがファティ・リンシャだけってのは、もう腹も立たないけど）

それでも、あまりな言いように、一言ぐらいは言いたくなる。

「さすがに命と引き替えにはしないわよ……そりゃあ、泣くけど……」

「だが、ぎりぎりまで諦めようとはしないだろうが。ファティ・リンシャもスカーも一緒となれば、その傾向はますます強まるのは目に見えている。危険物は持たないに限る」

本の虫にとっては、到底聞き捨てならない暴言に、ナルレイシアは思わず食ってかかろうとして……あることに、気づいた。

「スカーさん……？　も、一緒……って……？」

ファエンに――？

初耳である。

「どうやら、あいつの大伯父上もファエンにいらっしゃるらしい。それなら一緒にと……ファティ・リンシャがな」

「そ、そう……」

スカルトードは、かけがえのない本の虫同盟の同志だ。
ファエンまで同行するのに否やはない。ない、が……しかし。
「じゃあ……目立たずにってのは、無理ね」
何しろ彼は、柱神中でも最も美しいと言われている彼の大伯父――ネイスリーズとうり二つの美貌の主なのだ。
いるだけで、衆目を集めまくるのは間違いない。
下手すると、一目で魂を抜かれたひとたちが、ぞろぞろと後をついてくるなんて恐ろしい事態も……。
（いえ、馬車で移動なら、その心配はない、か……）
よかった、と胸をなで下ろしかけたナルレイシアは、しかし次のガスカールの台詞に凍り付いた。
「傍迷惑な顔だが、まあ……馬の扱いは上手いからな。さすがにわたしひとりで馬車を御するのは大変だろうから、せいぜいこき使ってやろう」
一瞬、ナルレイシアは彼がなにを言っているのか理解できなかった。
（わたしひとり……？　馬車を御す……って……？）
「えええぇっ？　なに、ガスカール、あなたも来るの？」

驚きのあまり、声がひっくり返った彼女に、青年はなにを今更（いまさら）とばかりの目を向けてきた。
「当たり前だろうが。お前のような恐ろしい災難吸引器と一緒に、ファティ・リンシャとスカーだけを一緒に外に出せるはずがないだろうが」
「……災難吸引器……」
（ひどい……あんまりな命名じゃない？）
ナルレイシアが泣きたくなったとしても、それは無理からぬことだったろう。
しかし。
「反論があるなら、一応聞くが？」
というガスカールの言葉に、しっかり自覚のある彼女がなにも言えるわけがなかった。

3

ロスタロイドを出立して五日目の午後のこと――。

空は晴れ渡り、初夏の気持ちよい風が吹き抜ける気持ちの良い昼下がり――であるにも拘わらず、ナルレイシアとファティ・リンシャ、スカルトード、ガスカールの四人は、何故か馬車で移動中……ではなく、セルフィアという街の宿屋の一室に落ち着いていた。

予定外の事態が生じたせいである。

「……疫病神」

ぽつり、と洩らされたガスカールの言葉に、ナルレイシアは身体を小さくした。

たらたらと、背筋を冷や汗が流れる。

「出立その日にまず馬車が脱輪」

エルスカーネ公爵家所有の馬車は、もちろん事前に整備点検されていた。

にも拘わらず、出立して半日もしない内に、なぜか後部車輪が外れるという事故に見舞われ

た。

「二日目、三日目は何事もなく、ほっとしていたら、四日目の昨日は道が川になるような土砂降りの大雨」

おかげで、行程は早々にずれこんだ。

「ようやく雨も上がり、この先急ぐつもりが、昨日の大雨のせいで崖崩れが起こって、通行不能……迂回しようにも馬車が使えそうな道はなく、予定通りにファエンに行くつもりなら、船を借りて水路で向かうしかないわけだが……ここまで災難続きな旅行で、水路なんかを選んでいいものかどうか、甚だ疑問というか、不安に思うのはわたしの杞憂かな？」

淡々とした口調で、この数日間に起こった事故を並べ立てるガスカールの声もまた、静かなものではあったのだが、底知れぬ怒りを感じるのはナルレイシアの気のせいではないはずだ。

「え、あ……う……」

わたしのせいじゃないわよ！

と、本当なら声を大にして叫びたい。

実際、彼女が関与して起こした事故も騒ぎもなかった。自分が原因であるかのように言われるのは心外というものだ——これまでの似たような経験がなければ、ナルレイシアだとて堂々と胸を張って潔白を主張したいところだった。

しかし、なにしろ彼女には前科がありすぎた。

彼女が望むと望まざるとに拘わらず、彼女のそばには災難が嬉々として寄ってくるのだ。正しくガスカールが評した通り、ナルレイシアが災難を吸引しているようにしか見えない。

その自覚がある身としては、通常ではあり得ない頻度で見舞われる事故や災難を、偶然の一言で片付けていいものかどうか悩んでしまうわけだ。

（ファティ・リンシャという神さまがご一緒してるんだから、災難なしとは言わなくても、半減はするだろうって思ってたのに……）

半減どころか、一割だって減ってはいない。

「まあまあ、カール」

睨まれ、言葉に詰まってしまったナルレイシアに救いの手を差し伸べるべく、口を挟んできたのは驚愕の美貌の主であるスカルトードだった

「ヴィル・ダカールをそう責めるものではないよ、実際、彼女が原因になった騒ぎなど、ひとつもないのだからね」

やんわりとした言葉で取りなしてくれるのは嬉しい——けれど、ナルレイシアは気づいてしまった。

スカルトードは決して「彼女を責めるのは筋違いだ」とは言わなかったことに。

「そうですよ、カール」
ファティ・リンシャもまた、援護に回ってくれた。
「ナーシアがあり得ないほどの凶運の持ち主であることを知った上で、同行させたのですから、このぐらいのことで目くじらを立てていてどうします。そんな狭量なことを言っていては、誰もあなたについてきてはくれませんよ」
やはりやんわりとした口調ながら……全然慰めになっていない。
（いっそ、責められたほうがましかもしれない……）
そう一瞬思ったものの、この三人にこぞって責められる場面を想像すると、居たたまれないどころか「生まれてきてご免なさい」という気分に陥りそうになるから、これはこれでよしとすべきだろうと考えた。
やさしいひとたちだが、言葉までやさしいとは限らない。
（でも、御柱の君である方とご一緒してても全然被害確率が減らないわたしの凶運ぶりって一体……）
思わず暗く落ち込みそうになるナルレイシアだった。
そんな彼女の心を掬い上げてくれたのは、銀髪の老婦人だった。
「物事は悪い面ではなく、良い面を見るものですよ。予定では、このセルフィアは通り過ぎる

だけの予定だったのですもの。折角だから楽しみましょう？　というわけで、ナーシア。わたくし、あなたにお願いがあるのだけれど、聞いてくれるかしら？」

勿論ナルレイシアに否やがあろうはずがなかった。

「なんでしょう!?」

「ファティ・リンシャ、そういうことならわたしが――」

「カールは黙ってなさい。あなたに靴下なんて頼めません」

途端に、ガスカールが黙り込む――確かに、女性用靴下は、成人男性が購入するには勇気のいる代物である……手袋ならともかく。

「靴下、ですか？」

（荷造りのお手伝いしてる時、充分すぎるぐらい詰めたと思ったんだけど……？）

内心首を傾げるナルレイシアに、ファティ・リンシャはにっこり笑ってうなずいた。

「セルフィアは知る人ぞ知る優秀なレース職人の街でね、この街の靴下は結構な人気なのよ。縁取りが何とも繊細で優雅で、しかも肌触りもいいものだから。ただ、数があまり出回っていないから、ロスタロイドでもなかなか手に入らないのよ。確かに見えない部分に贅を凝らすというのは一部の酔狂な人間の考えることだから、仕方がないことなのだけれど……。折角逗留することになったのですもの、買えるものなら買いたいじゃない？」

ね？

と同意を求められても、同席する男性二名に――何しろ、ものが靴下なだけに――答えられるはずがなく、残されたナルレイシアとしては、この場から解放してくれようというファティ・リンシャの温かい心遣いであることもわかるだけに、「興味ありませんから」と、救いの手を無下に払うこともできず……。

結果的に。

「そうですね」

と、どこか乾いた笑顔で応じることとなった。

かくしてナルレイシアは、雇用主たるファティ・リンシャの靴下を購入すべく、セルフィアの街にひとりで出かけることとなったのである。

宿の女将に評判のいい店を教えてもらい、靴下を扱っているそれらを全部回った結果、ナルレイシアが宿に戻る道を歩くころには、すでに陽は大きく西に傾いていた。

（ああ、お師匠……わたしはこの半日で、世の女性がいかに靴下にこだわりを持っているかを

学習したように思います……）

故郷フィレアの空の下、今日も元気に妖怪爺呼ばわりされているだろう学問雑学人間考察の師である老人の顔を思い浮かべながら、ナルレイシアは結局三足購入した上質の靴下を手に――正確には、靴下の入った包みを手に、宿への道を辿っていた。

足取りがふらふらしているのは、訪れた店における店員の熱意にあてられたからだ。

ついでに、彼らの意味深長な口調や物言いに、理解不能ゆえの疲労感も覚えていた。

（見えないところでこそお洒落……って言ってたはずなのに、なんでいつの間に、見せた場合の効果とかって話になってるんだか……。裾でもからげない限り、靴下の縁取りのレースなんか人目に触れないじゃない。それとも、わたしならそういうこと、しそうだって思われたとか？　……まあ、以前ロスタロイドで木に登って、「靴下見えるから止めてください」って文句言われたことはあるけど……）

過去にしっかり、貞操の危機を覚える騒ぎに巻き込まれた経験があるにも拘わらず、その一件以後、見事にそうしたことに無縁であったせいもあり、ナルレイシアの認識はお子様感覚に戻っていた。

恋愛問題に関連する事項は、ものの見事に現在の彼女の頭からは抜け落ちているのである。

仕方あるまい。

なにしろ、大変な役目を負っているとは言っても、一年近く穏やか——とは決して言い切れないが、少なくとも命の危険はない——日々を送ってきたのだ。その間に、ナルレイシアの心を占領していたのはほとんどが本の中身だった。

何と言っても、身近に同志がいるのだ。自然意識はそちらに向く。

そうして、歴史書やら文学書やら哲学書やら——読む本に困らない環境で、感想や解釈を語り合う理解者に恵まれ、思う存分その楽しみを満喫してきたのだ……少しばかり俗世間の常識から逸脱してしまっても、無理はないだろう。

齢十七の、見た目きらきらの美少女の中身としては、周囲の期待を裏切りまくっているのだとしても、だ。

……まあ、そんなわけで、訪ねた店の売り子の独特な価値観を延々と語られたことで、軽くはない精神的疲労感を覚えていたナルレイシアであったから、その足取りはおぼつかないとまではいかなくとも、しっかりしていたとは言い難い。

だもので、背後からどん、と人がぶつかってきた時、ついよろめいてしまったのだ。

（倒れる……のは、まずい！）

件の崖崩れのせいで足止めを食ったと思しき人間は多く、あまり広くはない通りには、人が溢れている。

（踏みつぶされることはないだろうけど、弾みで何人かには必ず踏まれるか蹴られるかする……それはまずい）

なぜなら、ファティ・リンシャに頼まれた新品の靴下を持っているから。

（これだけは死守しないと）

思いながら、右手で包みをしっかり抱きしめ、残る左手で倒れずにすむ支えを求めた。

その結果、何とか左腕で身体を支えることはかなったのだけれど。

「あ！」

「あ!?」

ふたつの声が重なった次の瞬間――。

倒れずにすんだナルレイシアの代わりとばかりに、かちん、かちゃん、と金属が石畳に落ちる音が響いたのである。

「あぁぁぁっ！」

盛大に嘆く野太い声が聞こえた。

「なに、間抜けによろけてやがんだ！　おまけに、ひとの大事な商品落としやがって！　割れたらどうしてくれるんだよっっ！」

怒鳴りつけられて、呆然としたナルレイシアは、男の声につられたように足下に目を向けた。

幾つか散らばる指輪が見えた。

銀色の台に、色石か色硝子かが嵌められたそれらは、細工もお粗末な代物だった。

ただし、石にせよ硝子にせよ、色自体は悪くない。

体勢を立て直して、彼女は落としてしまった指輪を拾い上げて言った。

「いい色の硝子ね」

加工技術が広まったせいで、生み出された当時のような、宝石並の価値はなくなったものの、品質のいい硝子は未だに一定以上の需要を受けている。

そのことを踏まえた上で、褒めたつもりの言葉だったのだが、なぜか露店の店主は顔を真っ赤にして怒り出した。

「硝子だなんて、なに言いやがるんだ、このわけもわからない娘っ子が！　うちは硝子なんて扱ってねえよ！　みんな、立派な石物ばかりだ！　変な言いがかりつけるんじゃねえ！」

（割れたらどうしてくれるんだって言ったくせに）

勿論、天然石の中にも、硝子並、あるいはそれ以上に脆い石もあるけれど、普通そこまでのものは宝飾品には用いられない。

ごくごく例外的に、非常に脆い石ながら、その美しさと稀少性ゆえに宝飾品として加工されることもあるが、そうした場合、細心の注意をもって扱われるということを、ナルレイシアは知っていた。

父が多岐に渡る商売をする商会社主だったために、知らず培った知識だった。

「硝子って名前がいけないの？　どれも職人さんが丹誠込めて作ったのがわかるいい品なのに、貴石の偽物にする方が失礼な気がするんだけど」

露店の主が一瞬息を呑んだ。

「そりゃあ、俺だっていい品だってわかってるけど……でも、硝子だって言った途端、みんな無価値みたいにいいやがってさ……本当に見る目なんか持たないくせに……」

ぶつくさぶつくさ文句を垂れる店主の言い種を聞いている内に、ナルレイシアの心にちらりと悪戯心が生まれた。

それは、露店の主が硝子の出来をきちんと認めた上で、世間の評価に憤りを感じていることを知ったが故のことだった。

色硝子を貴石だと言うのは明らかに詐意を孕んでおり、到底それは認められないが……けれ

ど。

「硝子の異称に玻璃って言葉があるけど？　小父さんが認める硝子玉だけ、玻璃玉って呼んだら？　でもって、その玻璃玉作った職人さんの腕に見合った値段をつけたらいいんじゃない？　それだったら、後でインチキだとか言われることもないし……」

「玻璃玉か！　そいつはいかにも貴石っぽいな！」

嬉々として返された言葉に、ナルレイシアは「あれぇ？」と思った。

「や、だから……貴石っぽいとかそういうんじゃなくて、いい出来の硝子は特別扱いしてもいいんじゃないかと思ったわけで……」

「おう、いい参考になったとも！　やっぱり、格言や諺ってのは馬鹿に出来ないな。お嬢が突然倒れ込んできておれんとこの商品、落としてくれた時には「なんつー疫病神だ」って思ったもんだけど、こんないい助言くれるだなんてなー。や、もう感謝感激雨あられってやつ？　屑石や硝子……おっといけねえ、玻璃石ばっかりだが、なんか気に入ったのがあったら、遠慮しないで持ってってくれよ」

言われても、対応に困ってしまうナルレイシアだった。

（だってこの人、根本的な部分ではものの本質わかってるのに、なぜだか表層意識は金権主義だし……）

矛盾の塊――だった。

（長居できないのがわかってる以上、関わりは作っちゃだめ、なんだよね……）

それは、ガスカールから耳にタコができるぐらい、うんざりするほど言い聞かされた言葉で――つまり、災難吸引器であるナルレイシアは、とことん他者に対して消極的であれ、というもので。

ロスタロイド出立前までは、彼のあまりにも高飛車な言いように反感を覚えさえしたナルレイシアだったのだけれど、この五日間のことを思い返せば、到底反論などできなくて。

だから、言いつけられた通り、大人しく、自発的行動は一切控えようと殊勝にも思っていたのだ……傍目にはそう見えずとも。

だが……運命はどこまでも皮肉な悪戯を仕掛けてくる。

「お心だけで充分です」

そう言って、露店の主の厚意からの申し出を辞退しようとした、その瞬間――視界に飛び込んできたのは、色あせたビロードの上に並べられていた品々の内のひとつ……。

何の変哲もない、黒ずんだ銀の土台に鈍い緑色の石――もしくは硝子玉――が嵌めこまれた安っぽい腕輪だった。

「やー、そう言わず！」

熱心に勧められては、興味を覚えたその腕輪に手を伸ばさずにはいられなくて。
「あの……じゃあ、これを頂いてもかまいませんか？」
気づけば唇は勝手にそう言葉を紡いでおり。
ナルレイシアはなぜだかわからない内に、鈍い光沢を放つ緑の石が嵌めこまれた腕輪を手に取っていたのである……。

4

アゼルフィアは激昂していた。

「シシャン！」

赤味の強い栗色の癖毛を奔放にはねさせたまま、明るい緑の瞳を怒りにきらきら輝かせながら隣家の扉を力一杯こぶしで叩いた少女は、それが開かれるなり家主である男――シシャンに詰め寄った。

「あんたの仕業でしょう!?　返しなさいよ、返しなさいよ、セロ爺の腕輪！」

大切に引き出しに仕舞っておいた大切な腕輪がなくなっていることに気づいたのはつい先ほどのことだった。

「フィア、落ち着けって……」

寝起きらしい男が、どこかぼんやりと言ってくるのも構わず、彼女は男の喉元をぎゅうぎゅう、ぎゅうぎゅうと締めあげた。

「これが落ち着いてられるもんですか！　あんたでしょう!?　あんたしか考えられないわよね？　セロ爺の腕輪、勝手にうちから持ち出したのは！」

返しなさいよ！

眦をつり上げ、アゼルフィアは叫んだ。

しかし、締め上げられた男――シシャンは今ひとつ、彼女の必死な様子が理解出来ないようだった。

「あん？　なんで、そんなに怒るんだぁ？　あれはセロ爺が、お前にって形見に残した物だろう？　石はくすんだ緑で価値はなさそうだったけど、一応台は本物の銀だったからな、おれが換金できるよう、引き取ってやったんじゃねえか。まあ、二束三文にしかならないのは目に見えてたけど、そんでも少しは懐の足しにはなるだろうって」

その言葉に、アゼルフィアは頭痛を覚えた。

シシャンに悪意はない……多分、きっと。

ただ、どこまでも独善的なのだ。三ヶ月ほど前に、アゼルフィアが手伝いをしては少額ながら給金を貰っていた店が看板を下ろして以来、収入源がなくなり生活がきつくなった彼女の身を心配してのお節介だとは……わかっているのだ。

（とは言っても、勝手に他人んちの箪笥から物持ち出してくのはどうかと思うけどね。という

か、前に一言の相談もなしにされたのでは、はっきり言って泥棒としか思えないのだけど）

「だからぁっ！　あれは形見として貰った物じゃないって何度も言ったじゃないの！　セロ爺が一番大事にしてた腕輪だから、故郷の神殿に戻してあげたいって……！」

セロ爺、と彼女たちが呼んでいた老人は、南の国で生まれたのだと言っていた。

地名は聞いたが、それがどの国のどこの地方にある街なのかはアゼルフィアにはわからない。

それでも、このディエーンではないことだけはなんとなくわかったので、彼女としてはこの国よりは南に位置する国の神殿に、セロ爺の形見である件の腕輪を届けたいとは思っていたのだ。

そのために、せっせと旅費を稼ぐべく、頑張って小銭を貯めている最中だというのに。

（なんだって、こいつは、そういうあたしの努力を台無しにするようなこと、するわけよ!?）

「いーい、シシャン。そういうのをね、世間では余計なお世話って言うの！　いいから返してちょうだい！　あれは、お金に換えられるものじゃないんだから」

見当外れな厚意を示してくれた男にそう告げると、アゼルフィアは男が商売に使っている革袋をひっくり返した。

なんと言われようと、セロ爺の遺してくれた腕輪を取り戻すつもりだったのだ。

しかし……しかしだ。

床に転がったいくつもの安物装飾品のなかに、求める腕輪は見あたらない。

「……ない？　まさかと思うけど、シシャン。あんた、昨日の今日であの腕輪、二束三文で売っぱらったんじゃないでしょうね!?」

噛みつかんばかりの勢いで問い詰めると、男は「そんなわけないだろ」と言ったものの、少しばかり考え込む顔になった。

そうして。

「あー、そういえば……」

と、続けられた言葉に、アゼルフィアはこの上なく眦を吊り上げ、「この馬鹿男！」と叫んだのである……。

セルフィアの街に足止めされて二日目の午前中――なぜか、ナルレイシアは両脇をスカルートとガスカールに挟まれた格好で、街を歩く羽目に陥っていた。

それというのも、昨日の午後、ファティ・リンシャのお遣いで靴下購入のために出かけた

折、うっかり左の手首を捻ってしまったせいだ。

優しく面倒見のよい老婦人は、そんなナルレイシアに不自由な思いをさせないために、同行者であるふたりの青年に、彼女の『お供』を命じたのだ。

因みに、ナルレイシアには特に街に出かける用はなく、手首も痛いことだし、部屋で静かに過ごしてもいいか——などと考えていたわけなのだが、「急に読みたくなった本があるのだけれど、探してきてくれないかしら？」と、女主に言われては断れるわけもなく……ついでに気に入った本があったら一緒に買ってきていいとのご褒美につられて街に出たというわけである。

ガスカールとスカルトードはその際の護衛兼荷物持ちだ。

「ケズィ・スルマーの短編集よね。何軒か当たったら、見つかると思うけど……うふふ、お許し貰った本は何にしようかしらー？」

ガスカールのせいで——彼に言わせると当然の配慮らしいのだが——この旅行に本の携帯を許されなかったため、活字に対する軽い禁断症状を起こしかけていたナルレイシアはご機嫌だった。

その思いは、同志であるスカルトードにはお見通しらしく、彼は親切にも購入する本についての助言をくれる。

「ヴィル・ダカール。新刊では難しいですが、最近は携帯しやすい軽装版も出てますよ。文字が小さいのが難点と言えば難点ですが、それさえ気にしなければ、いざという時も、懐にしまい込める小さなものも出るようになってます。旅行の友には最適だと思いますよ？」

それは非常にありがたい言葉だったが、ナルレイシアは少しばかり引っかかりを覚えた。

（……なんか、「いざという時」って部分に力が入ってなかった……？）

そう思うと、面白くないものを感じたけれど、そのことに関してなにか言うより前に、ガスカールが仏頂面で文句を言ってくれたので、意識がそちらに向いてしまった。

「おい、いくらファティ・リンシャのお許しが出たからと言って、際限なく何冊も買うんじゃないぞ？　特にスカー、お前は護衛も兼ねているんだからな、寝不足で足がもつれたなんてことになったら笑うに笑えない。くれぐれも、そのあたりは注意するように……というわけで、猿娘も自重すること。お前がいつまでも本に食らいついてると、こいつが羨ましがって駄々をこねかねんからな」

なんという言い種だろう。

憤慨しかけたものの、ナルレイシアもスカルトードも反論はできないのが辛いところだ。なぜなら、ガスカールが指摘したことは、確かに的を射たもので……過去、読書に耽りすぎたせいで、スカルトードが足をもつれさせるという失態を晒したのは、休日を前にいつまでも本に

しがみついていたナルレイシアにつきあっていたせい――という前例があったからだ。

旅行中、しかも災難吸引器であるナルレイシアがいる以上、いつ何時非常事態が発生しないとも限らない現在、読書が理由の睡眠不足が原因で、危急の際、遅れを取るというのは確かにまずい。わかっているから、ナルレイシアとスカルトードはガスカールに反論はせず、互いに目線で意思を確認しあった。

(二冊……なら、ガスカールも文句は言わないわよね?)

因みに、これは一人当たりの冊数である。

(いえ、一冊ずつにしておいたほうが無難かと……)

(でもそれだと、読み終わった本を交換するのに時差が生じませんか? やっぱり、最低もう一冊は……)

(そうですねえ、それでは先に読み終えた方が読むということで、ひとり一冊ずつにもう一冊だけ追加しましょう。短時間で読めるような薄い本ならカールも文句はないでしょうし)

(そうですね! そうしましょう!)

――以上、ナルレイシアとスカルトードの無言のやりとりである。

本が絡んだ場合、ふたりは目と目で通じ合えるのだ。

「……わかってますよ、カール。移動中に、かさばる荷物を徒に増やすような真似はしません

とも、ねえ、ヴィル・ダカール？」

軽やかにスカルトードが答えれば、にこにこ笑いながらナルレイシアもうなずいた。

「もちろん。ちゃあんと、それぐらいのことはわかってるから、心配いらないってば！」

すでに視線で相談済みのふたりの言葉に、しかしガスカールは疑わしそうな態度を崩さない。

隠れて買うつもりなのでは――と、疑っている様子だ。

その疑り深さに少々呆れながら、ナルレイシアが更に言葉を重ねようとした、まさにその時――。

甲高い少女の声が、周囲に響き渡った。

「見つけたーっっ！　そこ、動くんじゃないわよ、金髪のふたつ尻尾！」

（……へ？）

声の告げる内容はともかく、声の主らしき強い視線を感じたナルレイシアは、思わず立ち止まり、困惑のまま、右側を歩いていたスカルトードを見上げた。

視線の先、神々しいばかりの美貌の青年は、何とも複雑怪奇な顔で、微かに震えていた……笑いを堪えているのだと気付き、ナルレイシアは不機嫌に眉宇をひそめた。

一方、左側を歩いていたガスカールは、更に遠慮がなかった。

「ふ、ふたつ尻尾……っっ！」

とつぶやくなり、ぶぶっと盛大に吹き出してくれたのである。

（この男はぁ……っっ！）

何だって、こんなに自分の神経を逆なでする態度ばかり取るのだろう？

（ああ、かなうことなら、一度ぐうの音も出ないぐらいに締め上げてやりたい……）

かなわないから、それはできない。

ああ、悔しい——と思いながら、自分に向けられる視線と声を辿って振り返ったナルレイシアは、こちらに向かって駆け寄ってくる、自分より二つ三つ年下らしい少女の姿を認め、そっとため息を洩らした。

赤味を帯びた栗色の癖毛は、撫でつけた努力も見えないほどに奔放にはねている。

日に焼けた顔は、それでもすぐにわかるほどに真っ赤に染まっており、明るい緑の瞳も激情にきらきらと輝いている。

その表情を見れば——付け加えて言うなら、最初に掛けられた声の響きもあからさまだった——少女が怒りに支配されているのは明白だった。

わけがわからない。

それでも、なんとなく……この先、厄介なことになりそうなことだけは確信が持ててしまっ

て、ナルレイシアはそっと目を閉じた。
非常に不本意ながら、この手の予感が外れたことは、これまでの人生の中であった例がなかった。
(災難のお出ましだわ……)
多分、きっと——まず、間違いなく。
そうして、その予感は違うことなく的中したのである……。

「間違いないわ！」
近付くなり、少女は叫んだ。
「金髪のふたつ尻尾！　蜂蜜色の目！　あんたでしょう、シシャンの店からセロ爺の腕輪を持ち出したのは！　証拠は挙がってんのよ、さっさと返しなさいよ！」
もの凄い剣幕でまくし立てられ、ナルレイシアはすぐに反応できなかった。
(ふたつ尻尾……ってのは、わたしの髪型のことよね)
長い髪を両こめかみの高さでふたつにわけて結い上げ、その一部を垂らしている髪型は、あ

まり一般的なものでなく、だから人の記憶に残りやすいという自覚はある。というか、それを見越して故郷の母が仕込んだのだ。

事故や事件に巻き込まれやすい体質の娘が、実際に災難に巻き込まれた時、すぐにそうとわかるように、と。

要するに目印として、だ。

母がナルレイシアの髪型の参考にしたのは、東方世界にある国のものだったという話だから、確かに人目は引きまくる。東方人のほとんどが、黒髪か褐色の髪を持っている以上、明るい金髪のナルレイシアがその髪型にした場合、違和感をも醸し出してもの凄く目立つのだ。

その母の愛を、ナルレイシアがこれまで疑ったことはなかった。恨んだことも。

事実、ディエーンでは珍しすぎる髪型のおかげで、誘拐された時など、しっかり目撃証言を得られたわけで、それで無事に家族の元へ戻ることができたことも一度や二度ではないわけで……だから、本当にこの風変わりな髪型について、これまで一度だってナルレイシアが不満を抱いたことはなかったのだ。

けれど。

……けれど、である。

（ふたつ尻尾……って）

ちょっと、初対面時の呼びかけとしては、あまりというかかなりありがたくない。
しかも、言い種が気に入らない……まるで、こちらが勝手に誰かが大切にしていたものを強引に奪い取ったかの言いよう。
むかっとした。
とはいえ、相手は自分より確実に年下の少女だ。
(短気は損気……でも、本当にわけがわからないし……ああ、詳しいこと聞き出そうにも興奮してるし、あぁぁぁ、お師匠さま、こういうときはいったいどうしたらいいんでしょうかぁ!? 教えてくださーい!)
しかし、願いは虚しく空回りし、少女のきゃんきゃん甲高い文句も途絶えることはなかった。
「返してよ! 返しなさいよ!」
を繰り返す少女。
しかし、ナルレイシアとしては困惑するばかりだ。
なにしろ彼女が言う、シシャンもセロ爺も、聞いたことがないのだ。
第一、どこかから他人の持ち物を勝手に持ち出した覚えなどない。
つまりは、相手の。

「勘違いよ」

真実、そう信じてそう告げた。

その思いは真っ直ぐに、赤味を帯びた髪の少女に伝わったのだろう。

少女の表情が、一瞬にして崩れた。

それまで必死に保ってきた、強気な思いが挫かれ、一瞬にして少女は、今にも泣き出しそうな、幼子の顔になったのだ。

そうして少女――アゼルフィアは号泣した。往来の真ん中で。ナルレイシアの腰にすがりつくように抱きついたまま。

結果。

……もの凄く、目立ってしまった。

（どうしろって言うのーっ!?）

ナルレイシアは。

自分こそが泣き出したい気分で。

それでも、先に泣き出した少女の気分を落ち着かせるために、「ああ」とか「うん」とか「そうだね」とかつぶやきながら、赤味を帯びた髪を撫でつづけた。

そうでなければ、そもそもの事情すら聞き出せないのだから。

けれど……なぜだろう。

なぜだか、ナルレイシアはこの少女と関わりあったことを、いやだとは感じていなかった。

災難が来たという自覚はあっても、避けられる機会があるのなら、ここは避けるべきだと思うはずのところなのに……あるいは避けられない災難と無意識下で悟ってしまったのか……それは不明だけれど。

これは、避けられない嵐――。

そう、確信していた。

5

「ええ……と、つまり……」

泣きやまない少女――アゼルフィアを連れて宿に戻ったナルレイシアたちは、ファティ・リンシャの柔らかな対応と熱いお茶の御陰をもってして、ようやく彼女から事情を聞き出すことがかなった。

「そのシシャンというひとが、近所に住んでたセロというご老人の形見の品を、持ち主であるお嬢さんに一言の断りもなく、自分の露店に並べてしまったというわけですね……？」

やさしい声で、事実確認を取るのはスカルトードである――先ほどから苦虫を噛みつぶしたような顔をしているガスカールは、ファティ・リンシャのそばで沈黙を守っている。

「も、持ち主じゃないわ。預かっただけ……セロ爺はただ、神殿に持って行ってくれって言ってたけど、どうせならセロ爺の故郷の神殿に届けてあげたいなって思って、お金ためてたから……随分長く、手元に置いてしまったけど……」

鼻をすすりながら、アゼルフィアが答える――うつむき加減に顔を伏せるのは、もしかしたらその事実を恥ずかしがっているのかもしれない。

あるいは、そのまま隠匿するつもりだったと、こちらが誤解することを恐れてのことか。

（黙っておけばわからないこと、わざわざ自己申告するあたりで、そんなことする子じゃないってのははっきりしてるのに……）

そんなことを思いながら、ナルレイシアは小さく息をついた。

次に問いかけたのはファティ・リンシャだ。

「ところが、あなたが気づいたときにはすでに、そのシシャンというひとは、その腕輪を手放してしまっていた、と……」

こくり、と少女がうなずく。

「ありがたい忠告をしてくれたひとだったから、欲しいと言われて断れなかったって……」

（ちょっと、ちょっと、ちょっとーっっ！）

どうにも看過できない言葉だった――先ほどは、とにかく話を聞くのが先だからと、一切口を挟まなかったのだが、あまりにも事実と違いすぎる。

おかげで、先ほどからガスカールの視線が痛い。「なにをやっているんだ、この馬鹿」と、雄弁に語る紫の双眸は、ナルレイシアから外されることがない。

「……ということらしいのですが、ヴィル・ダカール？」

今度はこちらに確認の問いが向けられる番だった。

スカルトードの目もファティ・リンシャのそれにも、呆れや非難の色はなかったが、アゼルフィアに対して同情的なのは明らかだ。

「おおむねの流れは間違ってません。昨日確かにわたしはシシャンさんの露店で、ちょっと忠告ってほどじゃありませんけど、教えてあげたことがあって、シシャンさんはそれに喜んでお礼がしたいと仰いました」

「……それで、たかったのか」

ぼそりと洩らされた低い声はガスカールのものだ。

「たかってません！　お心だけで充分だとお断りしました！　でも、シシャンさんが熱心に是非、好きな品を持って行ってくれと仰ったから……ちょっと、気にもなった品だったから、じゃあこの腕輪を……って」

だが、ナルレイシアがその腕輪を選んだときも、シシャンは全然困ったようには見えなかった。

それどころか、『そんな見窄らしいのより、こっちの玻璃玉の指輪なんかどうだい？』なんて勧めてきたぐらいで……。

「あー、もしかして、あれは遠回しに別のにしてくれって言われてたのかしら……？　だとしたら、悪いことをしたわ。アゼルフィアも……ご免なさいね。街中捜し回ったんでしょう？」

素直に別の品を選んでいたら、少女の今日の苦労はなかったわけだから、心からの謝罪を口にした。

何にせよ、そういう事情なら、ナルレイシアに腕輪に関する所有権を主張するつもりはないのだ。

「別に……そもそもシシャンのせいだから。それに、シシャンのことだから、全然そんなつもりなんてなかったと思う。あのひとお調子者で、自分に都合の悪いことは隠そうとするし……なーんにも考えてなかったに違いないんだから」

すん、と小さく鼻を鳴らして、少女がかぶりをふった。

どうやら、ナルレイシアの言葉を信じてくれたようだ――ほっとして、ナルレイシアは腕輪を鞄から取り出すために立ち上がった。

「ちょっと待っててね、すぐに持って来るから」

災難吸引器呼ばわりされたナルレイシアは、就寝中でもすぐに動けるよう、荷物は寝室にまとめて置いているのだ……幸い、今のところ夜中の火事に見舞われたことはないが。

扉で仕切られた寝室に入り、鞄の内ポケットを探りながら、ナルレイシアは「あれ？」と声

を上げた。
おかしい。
昨日シシャンから押しつけ……もとい貰った腕輪は、手巾に包んでこのポケットに仕舞ったはずだ。一度だって取り出した覚えはない。
なのに――だ。
取り出した手巾のなかは空だった。
(ど、ど、どーしてっっ!?　まさか、泥棒に入られた!?)
いや、しかしそれはあり得ない、とすぐに否定する。
何しろ、宿の廊下に面した部屋で、ガスカールとスカルトードが並んで休んでいたのだ。廊下側からの侵入者を、彼らが許すはずがない。
では、寝室の窓はというと、内側からしっかり鍵をかけた上に、鎧戸まで閉めて眠ったのだ。窓の鍵だけならともかく、錆びて開け閉めの際かなり耳障りな音を立てる鎧戸を、自分たちに気づかれぬよう開けるのは無理だろう。
何より、ファティ・リンシャは精霊たちの親愛を一心に受けた柱神なのだ。彼女が眠る部屋に悪意を持った者を精霊たちが近づけるわけがない。
(だとしたら、えー、疑いたくはないけど宿のひと、とか……?　でも、やっぱり精霊たちが

そんなこと許すはずないし……だとしたら……だとしたら……？）

わからない。

夜中にうっかり寝ぼけて腕輪を取り出したのではと思い、寝台の周辺や下まで探したけれど収穫はなし。洗面室も探してみたけれど……結果は同じ。

（ど、どうしよう！　あんな話聞いた後で、なくなってました、なんて言ったら、返すの惜しくなって嘘ついてるとしか思われないじゃない！　そんなことじゃないのにーっっ！）

そんな誤解は絶対にご免被りたい。

だから、ナルレイシアは必死に腕輪を探した。可能性の在る場所全部、目を皿のようにして探したのだ……けれど。

（み、見つからない……）

泣きそうな顔で、彼女はアゼルフィアの待つ部屋へと足を向けた。

こうなったら、ファティ・リンシャかスカルトードかガスカールに、それらしいものを見かけなかったかどうか、尋ねる以外に道はなかったからだ。

大事にしていた形見ともいえる品を、ぞんざいに扱われたと思って、アゼルフィアが心を痛めるだろうことがわかっているだけに、非常に気が重い。

（でも、物が普通、勝手に動いたりするわけないんだから、やっぱりきっと、わたしのうっか

りが原因に違いないわけで……あうう。寝ぼけてたんだかなんだか知らないけど、その時のわたしを、わたしは呪うぞっ！）

断罪される気分を満喫しながら、のろのろとナルレイシアはアゼルフィアの待つ部屋へと戻った。

他に可能性があることには気づかないままに――。

「あー、その、えー」

覚悟は決めたつもりだったのだが、部屋に戻るなりに向けられた、アゼルフィアの期待に満ちた明るい緑の瞳を目にした途端、罪悪感で気分がずずん、と落ち込んだ。

そんな彼女の様子にいち早く気づいたのはスカルトードで、『ヴィル・ダカール？』と気遣わしげな声をかけてきた。

「……念のため、お三方にお尋ねしますけど……寝台脇の小机とか、洗面室の台だとか……床とかに、落ちてた物を見つけて拾われたってことは……ありませんよね……？」

駄目で元々のつもりの問いかけに、予想通り、否定の答えが返ってくる。

なにを唐突に――と、普通の相手なら首を傾げてくれるだろうが、いかんせん、ナルレイシアの旅の同行者は、三人が三人とも海千山千の……ファティ・リンシャは中でも飛び抜けているが……強者揃いである。

すぐに、彼女の質問の奥に隠された事実に気づいたようだ。

「……それは、つまり……ヴィル・ダカール？」

「紛失したとか言うんじゃあるまいな？」

困惑もあらわに前者の台詞を口にしたのは金髪の美青年で、氷もかくやという冷ややかな声で続けたのは黒髪の、見た目だけは二枚目の、毒舌魔神公爵だった。

「荷物全部ひっくり返して調べたのよっっ！　でも、見つからないから……寝ぼけて、取り出してどこかに置きっぱなしにした可能性もなきにしもあらずだと思って、思い当たる所は全部探したけど、それでもなかったから！　だから、後はわたしが迂闊に置き忘れてたのを、誰かが見つけて拾ってくれたのかなぁって……」

思ったんだけど……という言葉は、尻すぼみになってしまった。

三人の顔に「知りません」と書いてあったからだ。

（あああっっ！　これって、謎の紛失!?　それとも隠匿疑惑!?　わあ、アゼルフィアの顔が曇ってるっっ！　誤解解かなきゃ……でも、どうやって!?）

ナルレイシアは途方に暮れ、頭を抱えこみたくなった。
しかし、そこに救いの手が差し伸べられた。
「ナーシア、落ち着きなさい」
穏やかな老婦人の声が、宥めるように、慰撫するように、やさしい波動を伴って空気を震わせた。
「ファティ・リンシャ……」
その暖かい空気に、ついナルレイシアは縋るようにファティ・リンシャを見つめた――。
「落ち着いて、思い出して。荷物を全部ひっくり返して調べたと言ったけれど、本当に全部調べたの？」
その声に、責める響きは感じ取れなかったから、ナルレイシアはこくこくとうなずいた。
「調べました！　全部、全部……ポケットも全部ひっくり返して……」
でも、見つからなかったのだ。
「本当に？」
念を押すように尋ねられ、内心首を傾げながら――それでもナルレイシアはうなずいた。
「本当です」
神に誓って――と付け加えると、「それは待った方がいいわね」と言われた。

「……ファティ・リンシャ？」

もしや、疑われているのだろうか……？

そう思っただけで、目の前が真っ暗になりそうな錯覚に襲われた。

「わたし、わたし嘘なんて……！」

真っ青になって主張すると、なぜか銀髪の老婦人は困ったような苦笑を浮かべた。

「そんなことは思ってもいませんよ。ただ、ナーシアが見落としていることがあるんじゃないかと思っただけのことよ」

そこまで言って、ファティ・リンシャはふっと意味ありげな微笑を口元に浮かべ、言を継いだ。

「そう……たとえば、貴方がいつも懐に抱いているお守り袋の中、とかね……？」

「お守り袋……」

オウム返しにつぶやいて、ナルレイシアははっと息を呑んだ。

ナルレイシアはロスタロイドを出立して以来、確かに特別な『お守り』の入った革袋を懐に常時身につけていた。

ただし、その中に件の腕輪を入れたはずはない。

なぜなら、巾着の口が緩んで中身が落ちることがないよう、出立前にしっかりとその口を縫

い合わせたからだ。

その袋に腕輪を入れようと思ったら、まず縫いつけた糸を切らねばならないし、その上で解けにくさと複雑なことこの上ない結びの紐を解かなければならない。

どちらも、覚えがない。

ない以上、あり得ない……はず、なのだけれど。

「確かめてご覧なさいな」

なぜか、妙に楽しげなファティ・リンシャの様子に不安を覚えた。

大好きで、優しく頼りがいのある女主のことを、ナルレイシアはこの上なく信頼しているが、同時に彼女が無類の『面白がり』であることも、骨身にしみて知っているのだ。

（まさか……まさかね？　でも、ファティ・リンシャのこの楽しそうなお顔……なにか、確信してらっしゃる!?　って、いったいなにを!?　いやー、なんか怖いーっっ！）

半ば恐慌状態に陥りながらも、ナルレイシアはファティ・リンシャの笑顔の圧力に逆らえるほど錯乱してはいなかった。

「ちょ、ちょっと失礼を……」

一言断りを入れて、再び寝室に戻り、懐から件の革袋を取り出した彼女は、一縷の望みをかけて軽く振ってみた。

聞こえるのは、ちゃらん、ちゃらんという、硬貨がぶつかりあう音——当然だ。袋には四枚の神聖硬貨が入っているのだから。

けれど、その音に混じって——。

しゃらん、と鎖が奏でる音が、聞こえた時、ナルレイシアは本気で泣き出しそうになった。

(誰かー！　誰でもいいから嘘だって言って！)

しかし、彼女の願いを聞き届けてくれる者はいなかった。

悄然とした面持ちで、四人の待つ部屋に戻った彼女は、細かく縫い止めた糸を抜き取り、複雑怪奇な飾り結びをした紐をほどき、そうして中身をテーブルの上に並べたのだ。

創世七神たる虹神の正面の顔を刻んだ神聖硬貨が四枚——内一枚には、金色の細い縁取りがある。

それらと一緒に出てきた銀色の腕輪は——。

昨日初めて目にした時とは、明らかにどこかが違っていた。

くすんだ銀の地色はあまり変わりない。けれど、嵌めこまれている石の色が——昨日は確かに鈍く暗い緑だったはずだというのに、別の石であるかのように、透明度を増していたのだ。

「これ……」

アゼルフィアが、呆然とつぶやいた。

「セロ爺が持ってたころほどじゃないけど、綺麗に戻ってる……なんで？　セロ爺が死んでから、ずっとくすんでいく一方だったのに……」

その言葉に、ナルレイシアのなかでいやーな予感が強まっていく。

（いえ、でも、まさか……そんなはず……）

ない、と彼女は必死にそれを打ち消した。

たとえ、手巾に包んでいたはずの腕輪が勝手にお守り袋のなかに移動していようと――ロスタロイドを発つ前日、苦労して縫いつけた袋の口に、縫い直した痕跡が全く見あたらなかろうと……あり得ないだろうと、彼女は自身に言い聞かせた。

というか、信じたくなかったのだ――。

しかし、そんな彼女の心中などお構いなしに、ファティ・リンシャはアゼルフィアに笑顔で問いかけた。

「アゼルフィア、あなたがセロ爺と呼んでるひとのことなのだけれど、彼は歌うとき、瞳が緑に輝いたりはしなかったかしら？」

「なんで知ってるんですか!?　セロ爺は歌が大好きで、特に初夏の頃になると気がつけば歌っていたんですけど、時々灰色の瞳が緑に変わってました。あ、もしかして、お婆さんはセロ爺のこと知ってるんですか？　セロ爺の方が十歳以上は年上みたいですけど……」

少女の『お婆さん』発言に、ガスカールとスカルトードがぎょっとしたように身を引きかけたが、当の老婦人はおっとりと微笑んでうなずいた。

「友人と言えるほどに深くつきあっていたわけではありませんけどね、昔何度か会って、歌を聴かせて貰ったことがあるわ。セラ・オロイード……彼は稀代の歌い手でした。『緑風のセラ』の異名を取るほどのね」

この言葉に反応を示したのは、柱神を大伯父に持つスカルトードだった。

「セラ・オロイード……『緑風のセラ』……それはつまり!?」

(ああぁぁ、スカーさーん、やめてーっ！　お願いだからそれ以上話を進めないでーっ！　いやーんな予感なんか、当たって欲しくないんだからーっっ！)

しかし、どんなに逃げ出したくとも、共にある面々が、それを認めてくれない以上、ナルレイシアが現実から逃避することは不可能だった。

ファティ・リンシャが、わざとらしいまでの重々しさでうなずいた。

「ええ、セラ・オロイードは緑属の御柱の一員でした。そして、彼の形見の品が、ナーシアの元へたどり着いたということは……その意味は、説明するまでもないでしょう?」

悪戯っぽい笑みを浮かべるファティ・リンシャの双眸は、きらきらとどこまでも楽しそうに輝いていた。

（ファティ・リンシャーっ！）

そんなに嬉しそうに、わたしの新たな試練の始まりを告げないでくださーい！

内心、滂沱と涙を流しながら絶叫するナルレイシアの胸中を知ってか知らずか――いや、知っていてと言う悲しい確信はあったのだけれど――銀髪の老婦人は、はっきりきっぱりと宣言してくださった。

「これはセラ・オロイードの半身であった神宝、『翠唱子』でしょう。さすがはナーシアね、まさか、こんなに早く、引き寄せるとは思っていなかったわ」

楽しげな老婦人の声を聞きながら、ナルレイシアは脳裏に響き渡る鐘の音を確かに聞いたと思った。

それは、これから決して遠くはない内に、確実に訪れる騒動の始まりを知らせるもの――付け加えるなら、彼女の大いなる災難を意味していた……。

6

アゼルフィアは、呆然としていた。

頭のなかは、疑問符でいっぱいで、なにがどうしてこんなことになったのか、どうしても理解できない。

これまで一度だって座ったことのない、ふかふかの椅子に腰を下ろしている自分自身が信じられない。

しかも、目の前の、これまで見たことも想像したこともない綺麗で高価そうなテーブルの上に出されているのは触るのも怖いぐらいに繊細なティーカップで、「どうぞ」と言われたからと言って、おいそれとは手がのばせない。

（ああ、本当に……どうしてこんなことに……）

セルフィアの黄神殿の最奥の部屋――この街で一番偉いと言われる司祭さまの部屋で、お茶なんて出されているこの現実！

（夢!?　ああ、いっそ夢だったらどんなにか……）

そうは思うけれど、夢でないことは、ここまで来る間に何度も頬を抓って確認済みだ。

夢以上にあり得ない、この事態をいったいどう受け止めればいいのだろう……。

つらつら、つらつらと、彼女はこれまでのことを思い返す。

大好きだったセロ爺の腕輪を取り戻すために、シシャンが言っていた『金髪のふたつ尻尾』の娘を捜して街中を歩き回った。

ようやく見つけて、「返して!」と叫んで――怒りやら苛立ちやらが胸の中で暴れ出して、気がついたら泣きわめいていた。

往来の真ん中で、しがみつかれた挙げ句に泣きわめかれて、『ふたつ尻尾』の彼女はさぞかし迷惑なことだったろう……とは、少し落ち着いてから思ったことだ。

けれど、彼女は自分を振り払うことなく、優しく背を撫でてくれた。支離滅裂な自分の言い分など、半分以上理解できなかっただろうに、けれど決してなおざりではない態度で、「うん」とか「そうだね」と宥めてくれた。

面倒がって、適当な同意を口にするシシャンのことを知っていたから、その彼女の態度で、彼が言っていたことが、半分以上彼に都合良くねじ曲げられたものなのだろうとわかった。それでも、やっぱりセロ爺の腕輪だけは、自分が届けたいと思ったから、「お願い、返して」と

繰り返した。

そうして、『ふたつ尻尾』の少女が泊まっているという宿に連れて行かれて、まだ冷静になりきれなかった心を、そこにいた上品なお婆さんに鎮めてもらった。

激しやすくて、一度昂ぶってしまうと自分では制御できなくなる厄介な気性は自覚していたから、なるべく興奮しないように努めてきたけれど、大事なセロ爺の腕輪に拘わることだったせいでたがが外れたのだと思う。

そんな状態の自分を鎮めることができたのは、これまでセロ爺しかいなかった。

だから、セロ爺ほどではないけれど、ある程度まで落ち着かせることのできた『ふたつ尻尾』の彼女にビックリしたし、銀の髪のお婆さんの手が頭を撫でる感触が、セロ爺のそれにそっくりだったことにはもっと驚いた。

そうして、激してもつれあっていた感情が鎮まった状況で、質問に答える形で事態の説明を終えた時には、すっかり心は平静に戻っていた。

お調子者のシシャンの言動を、あくまで善意に解釈した挙げ句、「ご免ね」と謝られた時点で、アゼルフィアの中での怒りは完全に消えた。

（ああ、いいひとたちなんだ）

胸の奥がふわりと暖かくなった気がした。

こんなひとたちもいるんだ。だから、世界は捨てたものじゃない……。

そんな風に思っていたから、その後の騒ぎは意外というか、裏切られたような気がした。

『ちょっと待っててね、すぐに持って来るから』

と言って、席を立った『ふたつ尻尾』の彼女は中々戻って来なかった上に、「あー」とか「うー」とか言って、見つからないと言い出した。

うっかりさんなのかと思っていたら、綺麗なお婆さんが何かを指摘して、なぜだか複雑そうな顔になったけれど、一度奥の部屋に引っ込んで、戻って来た時、彼女が手にしていた小さな革の巾着袋からはセロ爺の腕輪が出てきたから、やっぱりうっかりさんなのね、と思ったのだけど。

でも、その後が酷かった。

優しいお婆さんが聞いてきたことに素直に答えたら、わけのわからない話になって……『神宝』だとか。『翠唱子』だとか。

挙げ句に、優しいお婆さんだと信じていたひとが、とんでもないことを言い出した。

「アゼルフィア。申し訳ないけれど、この腕輪をあなたに返すことはできなくなってしまったわ」

と。

その時の絶望と落胆は言葉では言い表せない。

(ひどい！　嘘つき！　裏切り者！)

思いはそのまま口を突いて出たと思う。

そんな自分に、「事情があるの」と言ったお婆さんは他のひとたちに何かを指示した後、一緒に来なさいと言って、そうして馬車に乗せられて……ここまで来てしまった。

生まれてからずっと、見慣れた建物に。

この国ディエーンを守護する柱神さまが属する神殿だから、この国で一番偉いとされている黄神殿に。

そうして、今自分がいるのは、最奥の……多分、とっても偉い神官さまの部屋。

胸がばくばくする。

息をするのも苦しいぐらいだ。

(わたしはただ、セロ爺の腕輪を返してほしかっただけなのに……)

これからいったいなにが起こるのか、想像することもできないアゼルフィアの心臓は、緊張のあまり破裂せんばかりだった。

そんな彼女は、近付いてくる足音にはっと息を呑んだ。

厚い扉が、重い音を立てて開く。

そうして、そこから現れたひとの姿を目にした瞬間、アゼルフィアは息が止まるかというほどの衝撃を覚えた。

（大祠祭さま……っっ！）

……目眩が、した。

そのひとは、このセルフィアにおける第一位の聖職者であるはずだった。

黄属の柱神が守護する国においては、他の神殿より黄神神殿の権威が強いのだ。辺境と呼べる地方にあっては例外も認められるが、このセルフィアではやはり黄神神殿が最も権威在る神殿と認識されている。

その、仮にも小さくはない地区の最高祠祭と見なされている人物――アルタードは、ナルレイシアたち一行がいる……というか、待たされていた応接室の部屋の扉をくぐるまでは、完璧な高位聖職者の顔と立ち居振る舞いを保っていた。

しかし、従者によって部屋の扉が閉められるなり、その身を包む空気は一変した。

見ているだけでほっとするような、柔和な空気を纏った老人は、にこやかに声を掛けてき

た。

「ファティ・リンシャ、いつこちらに？　言ってくだされば、歓迎の宴を開きましたのに」

聖職者としてその発言は如何なものだろう、と目を丸くしているナルレイシアの前で、ファティ・リンシャが苦笑した。

「せめて茶会とおっしゃいな。ご覧なさい、この子たちが驚いているじゃないの」

言われて初めて気づいたとばかりに、アルタードが軽く目を瞠った――そんなはずもなかろうに。

（もしかして、アルタードさまはなかなかの狸でらっしゃるのかしらん？）

嬉しくない確信を覚えながら、ナルレイシアは小さく頭を下げた。

ちらりと横目でアゼルフィアの様子を窺えば、彼女は驚きのあまり口を小さく開けたまま、凍り付いたように動けずにいる。

「これはこれは、可愛らしいお嬢さん方だ。わたしがあと三十若ければ……と、ファティ・リンシャ、冗談ですよ。そんなに睨まないでください」

大げさに肩をすくめる姿は、どう見ても聖職者のそれではない。

（神官服脱いで、街にくり出してそうな方だなあ……。しかもなんだか遊び上手そう……）

そんなことを思っていると、アルタードと目があった。

にこりと人好きのする笑顔を向けられ、思わず笑い返してしまう。引き込まれそうな、非常に魅力的な笑顔だったのだ。このひとの若いころには、さぞかし女性が心騒がせたことだろう。

そんな彼を、銀髪の老婦人は呆れを隠さぬ顔で窘めた。

「アルタード。いい年をした聖職者が、若い女性に妙な色気を振りまくんじゃありません。大事なナーシアを、あなたの毒牙にかけさせるつもりはありませんからね」

どこまで本気かわからない、かなり際どい言葉だが、冗談だったのだろう、アルタードは愉快そうに笑った。

「人聞きの悪いことをおっしゃらないでください、ファティ・リンシャ。お嬢さん方が誤解なさるじゃありませんか。それで、今日はいったい、どのようなご用件で？　まさか、神殿見物というわけでもないでしょう？」

「話が早くて助かるわ、アルタード。そう、今回少しばかり、お願いしたいことがあって、貴方を訪ねたのよ。それというのもね……ナーシア」

ファティ・リンシャに柔らかく促され、ナルレイシアは懐から件の革袋を取り出した。

応接用のテーブルに、中身を並べると、アルタードが驚きに目を瞠った。

「これは……話には聞いておりましたが……この目で見なければ、到底信じられませんでした

ね」

まさか、四方もの御柱を見極めるお役目を授けられるひとが現れようとは――。

並べられた四枚の神聖硬貨を見つめながら、アルタードは感嘆も露わな声で洩らした。

「そう……それでね、アルタード。ひとつ目のお願いなのだけれど、ナーシアのお役目について、こちらのアゼルフィアに説明してくれないかしら？　少し事情がありましてね、彼女が預かっていた品を、こちらが引き取らないといけないことになって、その理由を信じてもらうための説明役には、貴方が適役なのよ」

ひとつ目とか事情という言葉に、アルタードの目尻あたりがひくついたが……賢明にも彼はその場では問いかけることなく、鷹揚に「わかりました」と答えた。

そうして、彼はアゼルフィアに向かい、わかりやすい言葉を選んで、『選定者』のことを説明してくれた。

アゼルフィアはまだ戸惑いから醒めきれない様子だったが、説明が終わる頃には得心した顔で何度かうなずいていた。しかし全ての疑問が解消されたわけでは当然なく、訝しそうに、フアティ・リンシャに問いかけてきた。

「ナルレイシアさんがその、大切なお役目のひとだってことはわかりました。でも、それとセロ爺の腕輪を返して貰えないことと、どう関係があるんですか？」

「大ありなのよ。ナーシア」
再度促され、ナルレイシアは今度は件の腕輪を取り出した。
こちらには、アルタードが怪訝な顔をしたが、つづくファティ・リンシャの言葉に、先ほどの非ではない驚きを示した。
「アルタード。これが本題中の本題よ。この街に着くなり、ナーシアが知らずに手に入れてしまったの……『翠唱子』よ」
その銘の意味するところを、違えることなく理解した老人の口から、掠れた声が洩れた。
「……緑の、神宝……っ!?」
「ええ」
うなずいたファティ・リンシャは、嬉しそうににっこり笑った。
「そういうわけだから、アルタード。信頼のおける見届け役を、ひとりつけてくれないかしら?」
寝耳に水のこの言葉に、驚いたのはアルタードだけではなかった——。

「ファティ・リンシャ。見届け役って、なんのことですか？」

初めて聞く言葉に、ナルレイシアは思わず尋ねていた。

（聞いたことないし、そんなの。大体前回はそんなひと、ついてきたりはしなかったわよねえ……あ、それとも）

「ガスカールって、前回見届け役も兼ねていたとか……？　でも、それなら今度も一緒じゃいけないんですか？」

この言葉に、心底イヤそうな顔をして、否定の言葉を口にしたのは、言うまでもなく当人――ガスカールだった。

「馬鹿か、お前は。柱神の交代が、代々何を伴ってきたか、もう忘れたのか。俗世の人間が見届け役などできるはずがなかろうが」

……本当に、黒髪の青年公爵は言葉に容赦というものがない。

「なによ、そんな言い方ってないでしょう!?」

と、噛みついたものの、彼の発言はもっともだと納得できたものだから、それ以上の文句は控えた。

（そうだった……柱神さまが交代する時期には、代々王家の交代劇が起こっていたんだわ。それで、当代さまの時の選定者は暗殺されたんだって……。見届け役だなんて、きっと選定者の

そばにくっついて行動するわけよね。そんな役目を、どこかの貴族の息のかかったひとになんか任せたら、ひとつ間違えば命を狙われかねないじゃない。確かに、俗世のひとは選べないわよね）

ふう、と息をついて、ナルレイシアはガスカールに謝った。

「考えなしなことを口にして悪かったわ。でも、それじゃあ前回の見届け役って、いったい誰だったの？　わたし、心当たりがないんだけど」

これに呆れたように答えたのはスカルトードだった。

「なにを言ってるんですか、ヴィル・ダカール。これ以上はないという御方がいらっしゃるじゃありませんか！」

なぜわからないのか、それこそがわからないと言いたげな顔でそう言われたが、全然皆目見当がつかない。

くすくす笑いながら、助け船を出してくれたのはファティ・リンシャだった。

「アマンシールですよ。彼なら間違いが起こる可能性は皆無でしょう？」

「ア、アマンシールさまっ!?　アマンシールさまがそうだったんですか!?」

あまりのことに、ナルレイシアの声はひっくり返ってしまった。

（当代柱神さま自らが見届け役……。そりゃあ、間違いの起こりようがないわ。最後にちょっ

とズルしちゃったけど、あれはアマンシールさまが提案なさったことだしなぁ……そっかー、だからあんなに堂々とばれるはずがないと仰ってたのかー、納得）

一年ほど前のことを思い出しながら、いろいろと得心がいったナルレイシアだった。

「そうか……でも、今回はディエーンの柱神さまではないし、下手したら国外に出ることになるかもしれないから、アマンシールさまでは無理なんですね。えーと、でも……そういうことならファティ・リンシャにお願いするわけにはいかないんでしょうか？」

なんと言っても、アマンシールと同じ柱神さまである。

これに対して、ガスカールの反応は素早かった。

「寝言は寝てから言え！　お前のような災難吸引器とファティ・リンシャを常に一緒になどさせられるものか。お怪我でもさせたら、責任が取れるのか」

（馬鹿に引き続き、今度は寝言……ガスカール、ひどい……）

相手の毒舌にはすでに慣れっこになって久しいが、今回はさすがに少し傷ついた。

「……カール、言いたいことはわかりますが、もう少し言葉は選ぶべきでしょう？　仮にも妙齢の女性に向ける言葉ではありませんよ」

やんわり窘めるスカルトードだが、よくよく聞けばさりげなくひどい。

「……スカーさん……。あれ？　そう言えばスカーさんも神官籍をお持ちなんですよね。

スカーさんが見届け役というのは駄目なんですか？」

今度はファティ・リンシャが待ったをかけた。

「ナーシア。少しは自分の容姿に対して自覚を持ってちょうだい。あなたとスカーが一緒に歩いてご覧なさい、あっという間に人買い組織に目をつけられて頻繁に襲われますよ」

老婦人の台詞の前半には首をかしげたものの、後半部に関しては大いに納得したナルレイシアである。

「……あー、確かに」

「ヴィル・ダカール、あなたもひとのことは言えない程度には失礼ですよ。それで、ファティ・リンシャ、素朴な疑問なのですが、今回見つかったのは緑の神宝なのですから、緑神神殿に見届け役はお願いするのが筋なのではありませんか？　どうして黄神神殿なのです？」

（あ、そういえば……）

言われて気づいたが、確かにそうだ。

緑属の柱神に関わることは、緑神神殿の管轄のはずだ。なのにわざわざ黄神神殿を選んだのは、どんな理由があってのことなのか……。

「はは、スカルトード卿。それにはわたしから答えさせてもらおうか」

そう言ったのは、アルタードだった――声は笑っていたが、双眸に真摯な光が宿っている。

ナルレイシアは思わず居住まいを正した。

「確かに君の言う通り、今回の件は本来なら緑神神殿が取り組むべき問題だ。しかし、我が国の緑神神殿……というより、黄神神殿を除く六神殿には重大な欠点があってね。知っての通り、ディエーンの御柱の君はおふたりとも黄属だ。だから、御柱の君と密接な関係を築くことの多い黄神神殿では、権門に連なる者を極力排除しているわけだ……まあ、それでも完璧とは言い難いがね。その結果、権門出身者の神官は、黄神ではない各神殿に入ることになる。現在の緑神神殿の上層部が、まさにそれでねえ……そんなところに、緑属の神宝を持ち込んだりしたら、どんな騒ぎが巻き起こるか、想像がつくだろう？」

「なるほど」

と、スカルトードは大きくうなずいた。

「確かにそういう状況であれば、緑神神殿には持ち込めませんね。見届け役と称する間諜を呼び寄せることになりますし、下手をすれば刺客に早変わりしかねない。大いに納得いたしました」

得心がいったのはナルレイシアも同じだった。

一年前、初めて選定者としての務めを果たしたとき、それでも次代柱神候補の親族を名乗る者たちが、賄賂を手に押しかけてきたのには、心底うんざりさせられた。

情報源は神殿関係者に間違いなく、そのありようを大いに嘆いたわけだが――あれでも権門出身者を極力排除していたとは驚きだ。

つまるところ、今回緑神神殿の介入を許した場合、あれ以上の騒ぎと面倒が発生すること間違いなしということで……想像するだけで背筋に冷たいものが流れる。

（うー、冗談じゃないわ。それぐらいなら、こちらにお願いした方が、よっぽどまし……とは一概には言い切れないか。どんなひとが選ばれるか、わかんないもんなぁ）

とは言え、見届け役はどうやら絶対に必要らしい。

（それなら、なるべく気の合いそうなひとが選ばれたらいいなー。本好きだったら、言うことないんだけど……）

などなど、避けられない事態なら前向きに取り組もうとナルレイシアが思っていたときのことである。

「あ、あの……っっ！」

突然、アゼルフィアが声を上げた。

そして、思いも掛けないことを言い出した。

「その見届け役って、正籍持った神官さまでないと駄目なんでしょうか!?　あの、わたし、准籍なら持ってるんですけど、わたしじゃ駄目でしょうか!?」

その場に居合わせた、本人を除く全員が驚きに目を瞠った。

「アゼルフィア、と言いましたね。その歳で准籍とは……？　神殿に入って三年の修行を経なければ取得できないはずですが？」

アルタードの声には訝りが含まれていたが、疑念の響きはなかった――何事も、頭から否定しない柔軟な気質なのだと窺えて、ナルレイシアは彼に対する印象をひとつ格上げした。

「物心つくと同時に、神殿に預けられたんです……その、母さんが身体を壊して、育てることができないからって。しばらく養護施設にいたんですけど、五つになると同時に本殿に移って、十になるまで五年間修行しました。誓いの儀式まであと一年というころに、母さんが死んじゃって、結局そのまま神殿には戻らなかったんですけど。だから、正籍は持ちませんけど、准籍なら……」

「……なぜ、この役目を務めたいと思ったんですか？　大変名誉な役目には違いありませんが、先ほどからの話を聞いていれば、決して容易いことでないことはわかるはずです。脅したいわけではありませんが、ことによれば、命の危険に晒される可能性も出てきます。こちらのヴィル・ダカールも、一年前、危うく命を落としかけたと聞いております。そうしたことを覚悟した上での言葉なのですか？」

アルタードの口調は穏やかだったが、告げられる内容は決してやさしいものではなかった。

命の危険もあると聞いたときは、さすがに不安を覚えたのだろう、びくりと震えて窺うような目をナルレイシアに向けてきた。

本当に？

問いかけてくる視線に、嘘はつけなかったから、ナルレイシアはうなずいた。

誘拐されて、麻薬入りの冥眠香で眠らされた挙げ句、最後は濡れ衣を着せられて斬り殺されるところでした――とまでは、勿論言わなかったけれど。

そんなナルレイシアの様子に、アゼルフィアは一瞬固く目を瞑り、こぶしを握りしめた。

だが、すぐに目を開けると、固い決意をたたえた瞳ではっきりと答えた。

「はい。母さんが死んだとき、わたしは自分でも驚くほど呆然としたんです。あまり覚えていないし、悲しんだりしないだろうなって神殿を出るまでは思ってたんですけど、実際に母さんの遺体を目にした瞬間、体中から力という力がぬけてしまって……本当は、忘れてなんかなかったんです。神殿で修行を積んで、正式な神官籍を貰えたら、今度こそずっと母さんと暮らせるんだって……それを心の支えにしてたことに、そのときようやく気づいたんです。でも母さんは死んでしまって、二度と一緒には暮らせないんだと思ったら、もうなにをする気力も湧いてこなくて……当時のことは、よく思い出せないんですが、ひどい様子だったみたいです。そんなわたしを気遣って、面倒を見てくれたのがセロ爺……いえ、セラ・オロイードさまだった

んです。本当にやさしくて……あの方がいてくれたから、わたしはいま、こうして生きているんだと思います。だから……」

あの方の半身だった腕輪の行く末を見届けたいんです。

決して大きくはない声が、しんと静まりかえった室内にしみ通る。

そこに宿る心情が、誤解を生み出す余地もなく、聞く者の胸に伝わる。

（ああ……だから、彼女はあんなに必死にわたしのことを捜してたんだ……）

出会ったときのアゼルフィアの様子を思い出しながら、ナルレイシアはしみじみとそう思った。

「……決意のほどはわかりました。ですが、アゼルフィア。ひとつだけ確認を取っておきたいことがあります。『翠唱子』が、セラ・オロイードさまと似た方を新たな半身として選ぶとは限りません……かの方とはまったく違う気性の持ち主を選ぶ可能性もあります。それを目の当たりにしたとき、あなたはそれを認められると誓えますか？　きちんと見届けること――それだけが、この役目に就く者に求められることです。もしもできないようであれば、あなたの望みを聞き届けるわけにはいきません」

アルタードの言葉は、相変わらず厳しかった。

だが、今度はもう、アゼルフィアの瞳は揺れなかった。

「もちろんです。セロ爺……あ、と……セラ・オロイードさまはひとりきりです。わたしはふたり目のセラ・オロイードさまを見つけて欲しいわけじゃありません。本当に、ただ、『翠唱子』が選ぶ方がどんな方なのか、見届けたいだけなんです」

これ以上はない、はっきりとした答えに、それまで緊張をたたえていたアルタードの双眸がふっと和らいだ。

「あなたの言葉を信じましょう。わたしの名代として、無事に役目を務めてください。幸い、監督兼後見人に相応しい人材がふたりも揃っているようですしね」

にっこりと微笑まれた瞬間、アゼルフィアがほっと息をついた。

そうして、アルタードが次に目を向けた先には、ファティ・リンシャとスカルトードがいた。

「そういうわけですから、よろしくお願いいたしますよ、ファティ・リンシャ。なに、面倒などひとりみるのもふたりみるのもさほど変わりはないでしょう?」

――こうして、今回の見届け役は、アゼルフィアに決定したのである。

7

ウォルセンは、洗面室の鏡に映った己が顔を見て、げんなりしていた。

ここ数日というもの、頼まれていた仕事のために、ほとんど部屋に閉じこもっていたというのに……多少窶れた以外の変化がまるで見られないせいだった。

「いやになるなあ……」

ぶつぶつとつぶやきながら、彼は自らの顎に指を滑らせる。

つるんとした、なんの引っかかりもないなめらかな肌触りに、ますます眉間の皺が深くなった。

(そりゃあ、女性なら嬉しいんだろうけどさあ……)

ニキビひとつ出来ないことも、手入れしなくてもほとんど荒れるということのない肌も、日に当たっても多少赤くなるだけで日焼けすることのない体質も……本当に、自分が女性であったなら素直に喜べたと思うのだ。

だが、しかし。

不幸なことに、ウォルセンは男だった。

それも、あと半年ばかりで十八歳になるという年齢だ。

さすがにこの歳になってもひげの一本も生えてこない己が体質を感謝する気には到底なれない。

そのことを最大限に利用している自覚はあるが、それとこれとは別問題だ。

やはり、男児として生まれた以上、初対面の相手に性別を間違われる事態は遠慮したいではないか。

（栄養的には申し分なかったはずなんだけどなぁ……）

少なくとも、一年前までは。

それ以降は『洗うが如き』赤貧生活を送っているが、それでも一向に荒れない肌がいっそ呪わしい。薄く白粉を乗せ、のど仏を隠しただけで、たやすく性別を偽れる顔も身体も劣等感を誘うものでしかない。

「あー、まあ、白粉の消費量が少なくて済むのは……取りあえずはありがたいか？」

ちっとも慰めにならないことをつぶやきながら、ウォルセンは出かける準備を始めた。

古着屋で購入した簡素な女性用のドレスを身につけ――一年前に買ったというのに、未だに

裾も肩幅も補正の必要がないというあたりも、彼の鬱屈の原因のひとつだったりする——やはり安く買い叩いた栗色の長髪のかつらをかぶり、最後に顔に白粉をはたく。

さすがに紅は刷かないが、そのままでは不自然なので唇には艶の出る透明な軟膏を塗る。

そうして、改めて鏡を覗けば——そこにいるのは、栗色の髪に、少し緑味の強い榛の瞳をした、地味で野暮ったい女性の姿。

人目を引かないのはありがたいが、違和感が全く感じられないのは嬉しくない。

「こんな姿、親とあいつにだけは見せられないよな」

思わずつぶやいてしまった自分の言葉の矛盾に気付き、ウォルセンは自嘲の笑みに唇を歪めた。

(見せるもなにも……もう会えないってのに、なにを言ってるんだか……)

そう決めたのは、他でもない自分自身。

だというのに、事あるごとに思い出してしまうのはただの感傷だ。

(女々しいったらないよな)

そう思いながら、暗い思いに引きずられないために、ウォルセンは背伸びをした。

本当なら活を入れるために両頬をはたきたいところだったが、白粉をはたいた顔にそれをしては偽装が台無しになってしまう。

この街に、いつまでいられるかはわからないが、それでも食べていく上で、仕事は必要不可欠だ。それを支えているのがこの女装である以上、万が一にも崩すことはできない。

「よおぉっし！　本日の愚痴終了！　せっかく徹夜して仕上げたんだ、早いとこ届けて、仕立賃貰わないとな！　結構編み方に凝ったから、少しは上乗せしてもらえるだろうし……」

久しぶりに肉が買えるかなぁ――などとつぶやきながら、ウォルセンは手袋を嵌め、今朝編み上げたばかりの夏用のレースの肩掛けを広い布に包みこんだ。

ウォルセンが女装せざるを得ないのは、まさにそのため。

彼の生計は、婦人専門の服飾工房の下請け仕事によって成り立っているのだ……。

エアランは、ディエーン南西部に位置する中規模の街である。

馬で二日ほどの位置にファエンという温泉で知られる有名な街があるが、少なくとも初夏のこの時期、ファエンを目指してエアランを通り過ぎる客は多くはなく、だからこそウォルセンは安心して出かけることができるのだ。

（この夏物のレースの肩掛けは結構な収入になるはずだし……秋までに、もう一仕事はできる

かな？　でもって、寒くなってやばいことになる前に、さっさと引っ越して……ああ、出来ればその前に、今の工房の親方に、紹介状なんて貰えたら御の字なんだけど……欲張りすぎて、足が着いたらやばいし……どうしようかな……）

つらつら、つらつら、ウォルセンが思い悩むのには理由がある。

彼は一年ほど前、それまで住んでいた家から強引に自立した過去があるのだ。はっきり言うと、家出……否、もっと正確に言うなら出奔したのである。

事情が繊細且つ複雑だったせいもあり、大々的に手配こそされていないのだが、実家がウォルセンの家出を認めていないことは明らかで、この一年で実に三度の引っ越しを余儀なくされた過去がある。

大変優秀な情報収集能力のある実家であるから、ひとつどころに長居は禁物——だから、このエアランの街も冬が来る前に引き払うつもりではあるのだが、そのためにはどうしても金子が必要であり、頑張って働かざるを得ないのだ。

女装しているのも、そのためだ。

初めは素のまま、得意分野である縫い物、編み物、刺繍の腕を工房に売り込んだ。工房の職人は、男性中心だったからだ。

しかし、そうするとすぐに実家の追っ手がかかった。

ウォルセンがそうした方向に優れた技術を持っていることを、飛び出してきた家の主は十全に把握しており、的確に捕獲網を敷いてきたのだ。

そのことに気づいたウォルセンは、すぐにそのやり方を改めざるを得なかった。

あれこれ、試してみた。

株やら為替やら……他にも色々と。

しかし、相手はすぐにこちらを嗅ぎつけてくるのだ……まあ、幼なじみだし、親友だし、仕方ないと言えば仕方ないことかもしれないのだけれど。

それでも、このままではせっかく得た自由が台無しになってしまう——そう思った時点で、ウォルセンは頭の回線の一部を切り替えた。

その結果、導き出された答えが女装であったこととか、それに切り替えるなり実家の追及の手が明らかに緩くなったこととか……もの申したい気分は大いにあったものの、見つかって強制収容されるのはどうにもご免だったから、実家と幼なじみの目を誤魔化し得る手段としての女装を有効利用しつづけている。

とは言っても、これが一時しのぎにすぎないことはわかっている。

（早急に次の手段を見つけないといけないことはわかってるんだけど……）

それ、が見つからない。

（どうしたもんかなぁ……）

もう、あまり時間は残されていないのだけれど。

そんなことを思いながら、徹夜で編み上げた夏用肩掛けの包みを両手で抱きしめる格好で、通りをほてほてと歩いていたときのこと。

「きゃあぁぁっ！」

という甲高い女性の悲鳴が聞こえたかと思うと、立て続けに妙に格好いいというか、男前な台詞が、何故か少女の声で……耳に飛び込んできた。

「こぉの、引ったくり！　待たぬなら、待たざるを得なくしてやろう引ったくり！」

どこかで聞いたことのあるようなないような文句が聞こえたと思った次の瞬間――。

衝撃と共に、ウォルセンは尻餅をついていた。

「え？　あ？」

呆然とする彼の脇を、疾風のごとく駆け抜けていくのは、自分と同じくらいの歳の少女――金髪が光を反射してきらきらと輝いていた。

「無茶しないでください！」

その後を、悲鳴のような声を上げながら追いかけていく……こちらは十四、五の少女。

そうして、さらに彼らの先では、体勢を崩して派手に転んだ男の姿が見えた。恐らくは、少

女が追いかけていた引ったくり犯なのだろう。
果たして、追いついた少女が後ろ手に男の手首を素早く縛り上げている――はっきり言って、素人とは思えない手際である。
（何者だ……？）
ぽかんとしてその様子を見つめていたウォルセンは、しかしすぐに臀部の濡れた感触に眉をひそめた。
朝方降った雨のせいで、あちこちに水たまりができている。どうやらそのひとつに尻餅をついてしまったようだ。
（あー、これじゃみっともなくて歩けないや。換えのドレスなんか持たないし、乾くのを待って出直しだな）
どうせなら、仮眠でも取ろうか……などと暢気なことを考えながら、彼は届けるつもりだった荷物を求めて――ぶつかった拍子に落としたのだ――視線を路上に彷徨わせ……そして。
それを見つけた瞬間、この世の終わりをかいま見たかのような悲鳴を上げた。
「うわあぁぁぁっっっ！」
徹夜で編み上げた夏用肩掛けの入った包みは――ひときわ大きな水たまりに落ちていたのである……。

（このひと、本当になにか憑いてるんじゃないかしら!?）

セルフィアを出立して以来、もう何度目になるかもわからない騒ぎに、またしても巻き込まれた——いや、今回は本人が首を突っ込んだという方が正しいが——選定者である少女の姿を見つめながら、アゼルフィアは深く息をついた。

連れの、とんでもない二枚目の青年が、『災難吸引器』と呼ぶのも無理はないぐらいに、ナルレイシアという少女は騒ぎと縁深い。

今回についてもそうだ。

エアランに着いたのは、ほんの先ほどのことである。宿に落ち着いたはいいものの、荷物をほどいている途中で、ファティ・リンシャが好きな銘柄の茶葉が切れていることに気づいた彼女は、善は急げと買い物に街にくり出した。

いつもであれば同行するふたりの青年は、それぞれ用事があるということで、アゼルフィアだけがついてきたのだ。エアランが長閑な街であるため、さすがのナルレイシアでも騒ぎを引き寄せはしないだろうと判断したらしいが……それが大いなる間違いであったことは言うまで

もない。

宿で教えてもらった茶葉を扱う店に向かう途中で、なんとすぐそばを歩いていた女性が荷物を引ったくられたのだ。

それを知るなり駆け出したナルレイシアを、泣きたい思いで追いかけた。

（ただでさえ騒ぎに巻き込まれやすいくせに、自分から率先して首を突っ込まないでよ！）

と、言いたかったが……さすがに、ひととして間違った行為ではないから、咎めるわけにもいかなかった。

騒ぎに慣れているだけあってか、ナルレイシアの手際はあざやかだった。まず、走りながら自分の持っていた巾着から財布だけ取り出すと、逃げる男目がけて投げつけた。

見事なコントロールで、巾着は見事に男の後頭部を直撃した——何が入っているのか、その際重い音が響いた。

そして体勢を崩した男にあっという間に追いつくと、相手が起き上がる前に、その両手首を後ろ手に摑み、髪を飾っていたリボンで手早く縛るという……見事な早業だった。

見た目は完璧に可憐な美少女なのに、この手練は何事だろう。

周囲からは、「いいぞ、嬢ちゃん！」とか「お手柄だな！」と好意的な声がかけられている。

（ああぁ、茶葉買いに出ただけのはずだったのに……）

深く息をつきながら、アゼルフィアは前途の多難さを思った。

この調子で、自分が役目を果たし終えるまでに、ナルレイシアは一体どれほどの騒ぎに拘わることになるのだろうか、と……。

と、その時のことだった。

不意に、空気を切り裂く——聞くだけで胸が詰まるような、悲痛な声が響き渡った。

何事かとそちらに目を向ければ、路上に座り込んだ、あまりセンスに恵まれていない二十歳前後の女性の姿がある。

(確か、ナルレイシアさんがひったくり犯追いかけてる途中で何人かにぶつかってた、そのうちのひとり……よね?)

雨上がりのまだ濡れた石畳は、かなり泥で汚れている。

そこに尻餅をついたとあれば、ドレスは悲惨なことになっているに違いなく、アゼルフィアは連帯責任から、その女性に対して罪悪感を抱いた。

気づくと、ナルレイシアがそばに戻ってきていた。

「な、なに?」

こそり、と尋ねてきた彼女に、アゼルフィアはそっと件の女性を指し示しながら、「さっきぶつかったひとみたいですよ」と小さな声で囁いた。

「……それは――」

悪いことをしちゃったわ……とつづくであろうと思われたナルレイシアの声は、しかし唐突に息を呑む音で立ち消えた。

「……ナルレイシアさん？」

首をかしげて彼女を振り返ったアゼルフィアは、黄玉の双眸を大きく瞠り、「うそぉ」とつぶやく少女の姿を認め……そうして。

声を出さずに動くその唇が『また事情ありそうな……』と紡ぐのを、見た――。

8

エアランの北の街外れ――掘っ立て小屋がいくつか並ぶ寂しい場所を、若い男がひょうひょうとした足取りで歩いていた。

このあたりでは見かけない彫りの浅い顔立ちと象牙色の肌は、男が遙か東方の国の生まれであることを示していた。

身につけている服装にしてもまた然り。

襟が高く、あわせを紐で編んだ釦で留める仕組みになっている長衣は、このあたりでは見かけないものだ。

はっきり言って、目立つ。

しかし男は気にする様子もなく歩きつづけ、やがてある小屋の前に立つと、扉代わりに掛けられた布を払って中に入った。

「爺さん、邪魔するぜ」

そう告げる声は明るい。

「今日は爺さんの顔の広さを見込んで、頼みたいことがあってさぁ」

軽い口調を向けるのは、この小屋の主である老人だ。

真っ白な髪と皺だらけの顔からは、老人の正確な年齢は読み取れない。相当な老齢であることは間違いないだろうが、ではいくつぐらいかと訊かれると、答えに詰まる——そんな顔だった。

「おう、リーイン坊やか。相変わらず、目立つ格好をしておるな。郷に入れば郷に従えという言葉を知らんのか」

「放っとけよ。東方の不思議術の操り手は、それらしい格好してた方が話がうまくいくんだよ」

リーイン——リーイン・ル・ファンは、べっと舌を出しながらそう嘯いた。

二十代半ばのこの男の職業は、『結界術師』という、一般ではついぞ耳にしない特殊なものである。

東方で生まれた術であるため、その詳細はあまり知られていないが、非常に利用範囲の広い力ではある——表向きにも裏向きにも。

そして、リーインは己が力を揮うにあたり、報酬の額にこだわることが多いため、あまりひ

とさまに自慢できない依頼を請け負うことが多い……ごくたまに気まぐれで、限りなく無償奉仕に近い仕事を受けることがないでもなかったが。

「はったりをきかさなければ仕事にありつけんようでは、まだまだひよっこじゃよ。にしても、どうした？　確か数年は遊んで暮らせるだけの報酬の仕事を受けたんじゃなかったか？」

それは一年半ほど前に、リーインがここを訪れた際に言っていたことだ。

彼の訪問はそれ以来だ。

「おう。そのはずだったんだけどな、仕事の途中ででっかい騒ぎが起こってくれてよ……聞かなかったかい、ロスタロイドの黄金竜騒ぎ。あれのおかげでしっちゃかめっちゃかになっちまって、後金取りはぐれたんだ。おかげで真面目に働かざるを得なくなっちまってなー、今回なんざ、本業の前に人捜しまでやんなきゃならないんだよ」

当てにしていた報酬を諦め、逃げ出すようにロスタロイドを出たのは一年前のことだ。

愚痴も言いたくなる。

老人が、おかしそうに笑った。

「運にそっぽを向かれるようじゃ、道は遠いのぉ。しかし、人捜しとは……まさか拐かしではあるまいな？」

裏の事情に通じたこの老人は、大抵の悪事には目を瞑るものの、女性や子供の誘拐や人身売

買だけは許さない。
元々姿を消した幼い我が子を捜すために、この世界に身を沈めたという話だから、無理もないことだ。
「違うよ。家出息子を連れ戻してほしいって依頼。まあ、十六……いや、いまはもう十七か。そこまで育ったら、普通独り立ちしたと思うもんだろうに、貴族の連中の考え方はわからねえよな」
呆れたように、肩を竦めながら、リーインはこっそり胸中で洩らす。
（ま、確かに狙う一派もいるってんなら、無理矢理にでも連れ戻して保護下に置きたいってのもわからんじゃないが……なーんか、すっきりしないんだよな。まだ全部話してない事情がありそうで）
何しろ相手はお貴族さまだ――依頼にあたって隠し事があるのは珍しくない。
しかし、一年前の仕事の失敗が、そのせいだったことを思えば、「はいそうですか」と受け入れてもいられない。
どうせ、訊いても教えてはくれないだろうから、ここは勝手に調べさせてもらうだけだ。
「ほほう。まあ、貴族というものは身内にだけは甘かったりするからのう……それで、ここに来たということは、その坊やはこの近くに隠れているというわけか？」

「そういうこと。この街とは限らないが、ここいら近辺に隠れてるのは間違いないらしい。なんでも独特な気配の持ち主で、占うのには困らないんだと」

それでも見つからないということは、よほど上手く隠れている上に、追っ手がかかる寸前に場所を移っているわけだ。

かなり頭の回転が速く、更に勘も鋭いに違いない。

「ほっほ、それで気配を読むのが得意なお前さんに話がきたわけか。しかし、そういうことならわしの力なぞ、必要ではあるまい？　そこまで隠れ鬼が得意となると、そうそうひとの記憶に残るような真似はしておらんだろうしの」

確かに、それはそうだろう。

「うん、いや……そっちは、こっちで何とかできると思ってる。爺さんに頼みたいのは別のことでさ」

そう言って、リーインは懐から一枚の紙を取り出した。

そこに描かれているのは、翼の生えた蛇が、丸いなにかに巻き付いているかのような図案だった。

「ふ、ん？」

目を細めながら紙面を見つめる老人に、リーインは説明した。

「その坊主の腕にある痣の形らしいんだが……いかにも意味ありげだろ？　普通の痣じゃないか……あるいは刺青か。どっちにしろ引っかかる。こっちの世界の伝承にはさすがにおれも詳しくねえからさ、調べて貰えないかと思って」

だが、老人はすぐには答えなかった。

「リーイン……あまりよろしくないものを感じるぞ。この仕事は断るわけにはいかんのか？」

老人の声には、青年を気遣う響きが宿っていた。

老人とのつきあいは、まだ数年に過ぎないが、何しろ行き倒れていたところを拾われたという出会いだっただけに、ふたりの間には仕事関係以上の繋がりがある。

そうしたわけだから、リーインも相手の厚意は素直にありがたいと思うのだ。

「はは、そうしたいのは山々だけどなぁ、依頼主ってのが若いくせにおっかないのなんのって。質も取られちまったし、頑張るしかないわけ」

「質、じゃと？」

「そう、髪の毛一房」

何でもないことのように答えはしたものの、それが口調ほど軽い意味を持たないことは重々承知している。

それは、老人にしても同じことで、ふう、と絞り出すようなため息をついた後、疲れた声で

ぼそりと洩らした。

「お前さんともあろうものが、また迂闊だったな」

（本当になぁ……）

しみじみとうなずきながら、リーインはそれでも前向きだった。

「つまり、そういうわけで、逃げだそうなんてした日には、お抱えの凄腕占者に居場所を突き止められて恐ろしいお客さんとの鬼ごっこに突入するってこと。そんな目に遭いたくなけりゃ、頑張って家出坊主連れ戻すしかないわけよ」

老人も、それ以上はかける言葉がないのか、目を瞑ったまま、何度かかぶりをふった。

「じゃあ、爺さん、その図案のこと、よろしくな。見つけても見つからなくても、三日に一度はこっちに顔を出すからさ」

そう言い、リーインは立ち上がった。

最後に老人が口にした言葉は――。

「土産は酒と燻製肉でいいぞ」

だった――。

ナルレイシアたち一行が、エアランに到着する前日の午後の出来事である……。

それは、胸を締め付けられるような絶望に満ちた悲鳴だった。
無事に引ったくり犯を縛り上げ、近くにいた男性に警邏隊に引き渡してくれるよう頼んでいたときに聞こえてきたそれに、ナルレイシアは吃驚した。
「あ、お願いしますね」
と、男性にひったくり犯の身柄を委ねると、彼女は少し離れたところで立ち止まり、声のした方を振り返っているアゼルフィアの元へ歩み寄る。
「な、なに？」
いまの悲鳴、なに？
と尋ねると、彼女は視線で路上に座りこんだまま呆然としているドレス姿の女性を指し示し、小さく「さっきぶつかったひとみたいですよ」と教えてくれた。咎めるような響きがその声に宿っているように思えたのは……きっと気のせいではないだろう。
（あちゃあ……）
確かに、さっきはひったくり犯を追いかけるのに夢中で、何度かひとにぶつかった。それでよろけて、まだ乾ききっていない路上に倒れたというのなら、間違いなく自分のせいだ。

「それは……」

悪いことをしちゃったわ——と続けようとしたナルレイシアは、思いがけない事態に陥り、はっと息を呑んだ。

（なに!?　気のせい!?）

目が疲れているのかと思い、指で何度か目元をこすり、もう一度その女性に目を向ける……が。

（やっぱり視える……きらきらの光の粒が……）

周囲のひとには見えていないだろう輝きが、問題の女性を包んでいるのがはっきりと視えたのだ。

それは、彼女が持つ特殊な能力である。

これまで片手の指の数では足らないほどに生死の境を彷徨った経験のせいか、あるいは選定者になったせいなのか——そのあたりは判然としないが、ナルレイシアには異能を持つ人間を、見分けることができるのだ。

それが、いま彼女が視て……あるいは感じている『光』だ。

異能を持つひとの周囲に、彼女は必ず光の粒を見いだす。

それは強かったり弱かったり、色もさまざまであるけれど、概ねその光の強弱はその人物の

能力の強さと比例している。色彩に関しては、あまりよくわからない……もしかしたら色によって推し量れることがあるのかもしれないが、そこまで異能者は多くはいない。

件の女性の身を包むのは、淡い金と緑の入り交じった光の粒だ。色こそ淡いが、輝きそのものは強く大きい。

自覚があるかどうかは別として、大変な異能の資質を持っているのは間違いないだろう。

（苦労してるのかしら？　それで目立たないように、あんな地味な格好をしてるんだとか……あれ？　でも、ちょっと待って……）

何かが、引っかかった。

先ほど聞こえた、悲鳴……あれは。

（んん？　なんか、さっきの声は女性にしては低かったというか……低すぎたというか……てっきり男のひとだと思いこんだ……んだけど……）

けれど、座り込んでいるのはどう見ても女性だ。

いや、待て、とナルレイシアは指で眉間を押さえた。

じいぃっと、もう一度凝視する。

（肌、つるつるよね……ひげのそり跡、なし。だけど、十代半ばぐらいだと、なかなかひげが生えないひともいるって聞いた覚えがあるわ。スカーさんもそうだったって話だし。で、喉は

……スカーフで隠れちゃってて見えないか。これは、もしかしたらもしかするかも……）

だが、もしそうなら――ナルレイシアの想像が正しければ、相手は少々どころでない面倒な事情を抱えている可能性が高い。

好きでやっている女装とは、到底思えないからだ。

普通、心は女性であるひとや、趣味として女性の衣装を好むひとというのは、なるべく華やかなそれを好むものなのだ。

敢えて地味な女装をするということは……身を隠すための行為としか思えない。

（お忍びか、家出か……最悪の場合、誰かに狙われている、とか……？）

だったら、関わるべきではない――本来なら。

だが、関わらないわけにはいかないのだ、今回は。

なにしろ、神宝『翠唱子』がすでに、自分の手元にあるのだから。その矢先に見つけた、強い光を纏う異能力者。

神宝が選ぶ相手の多くが不思議な力の持ち主であることを考えれば、ここで見逃すわけにはいかない。

相手はもしかしたら『翠唱子』が半身に選ぶ、新たな柱神かもしれないのだから！

（まずは、確認が先よね。見たところ、ドレスは悲惨なことになってるだろうし……あー、も

しかしてさっきの悲鳴の原因って、そばの水たまりに落ちた包みかしら。泥水まみれになっちゃってるわよねえ、あれ。よし、それを口実にして、謝り倒しながら宿に連れ込もうっと！）

このときのナルレイシアの心の声を聞く者があったら、「なんてひどい娘なんだ」と口を揃えて非難したに違いない。

しかし、ナルレイシアだって切実なのだ。

選定者としての務めは、今回を除いてもまだふたつ、残っているのだ。

さくさくと片付けられるような片付けてしまいたいではないか。

（よし、じゃあそういうことで）

外れの場合はさよならしてしまえばいいし――などと、ますますひどいことを考えながら、ナルレイシアはアゼルフィアに声をかけた。

「ねえ、あの方のあの惨状って、どう考えてもわたしのせいよね？　宿にお連れして、せめてドレスの染み抜きだけでもしてさしあげたいと思うんだけど、どう思う？」

故郷を出て以来、何度も俄女優になる羽目に陥った彼女の演技力は、日に日に磨きがかかり、いまでは台本なしに短い即興ならこなせるほどになっている。

そんなナルレイシアの演技を見抜ける者など、本性をよく知る身近な人間以外にはおらず……アゼルフィアはまだ、そこまでは至っていなかった。

「そうですね、それがいいと思います」

こくりとうなずく連れの少女の顔を見ながら、ナルレイシアはひとつだけ心に決めた。

（もし、あのひとが選ばれても、この子にはすぐには教えないでおいた方がいい……よね？紹介するなら、女装を解いてちゃんと男性の格好してるときでないと……さすがに大好きな恩人の後が、女装した若い男性だなんて、認めたくはないだろうし……）

真っ直ぐで何事にもひたむきな少女の心の平安のためにも、その方がいいだろうと配慮（はいりょ）してのことだった。

9

（な、な、なんで……なんでこんなことになってるんだ!?）

表情だけは笑顔のまま、ウォルセンは大いに混乱し、困惑していた。

場所はこのエアランでも一二を争う高級宿屋『白鷺館』――その最上室に連れこま……いや、連れて来られただけでも驚きだというのに、なぜかそこでお茶を差し出されているこの現実が信じられない。

編み上げたばかりの肩掛けが泥水まみれになったことを知った瞬間、悲鳴をあげたきり――彼の意識はしばらく凍り付いたまま、その頭も正常に機能していなかった。

ただ、やさしい声で何事か話しかけられたような覚えは……うっすらと残っている。

多分、それが――いま目の前でお茶を淹れてくれている少女なのだろう。眩しい金髪に、きらきら輝く黄玉の瞳が実に印象的な美少女である。

ナルレイシアと名乗った彼女は、しかしなかなか強引で、この『白鷺館』に着くなり宿の人

間がウォルセンの格好に眉をひそめるのを綺麗に無視して、染み抜き道具一式を部屋に届けてくれるよう言いつけた。

さすがに少しは頭が動き出していたウォルセンは、その場で彼女の部屋への招待を断ったのだが、ほとんど無理矢理、部屋に案内されてしまった。言葉を振り切って帰ろうにも、ナルレイシアの腕に抱かれた——泥水まみれになったとはいえ、徹夜までして仕上げた——肩掛けが気になってできなかったのだ。

（あれさえなければ、間違ってもこんな、金持ち連中が集まる宿になんか来なかったのに……）

わざとではないだろうが、ほとんど質を取られた気分だった。

ものが編み物である以上、泥水につかった肩掛けを綺麗にするのは無理だろうが、それでもかけた手間暇を思うと、やはり諦めることはできなかったのだ。

そうして部屋に入るなり、ドレスのしみを抜くから『こちらに着替えてくださいね』と室内用長衣を押しつけられた上で、洗面室に追いやられ……女装がばれては大変と、必死に断ろうとしたところ、こちらの言葉など全く耳に入れていない様子の彼女は『ああ、後ろの釦を外すのが大変ですか？　でしたら手伝いますから』などと、とんでもないことを言い出してくれたのだ。

引きつった声で『結構です！　ひとりでできますから！』と叫んで洗面室に飛び込むのがやっとだった。

そして、実に肌触りのよい室内用長衣に着替えたところで、今度はドレスを奪われて、現在お茶をご馳走されているというわけだ。

（うん、なんだ……おれ、ちゃんと覚えてるじゃないか。頭凍り付いてても、それなりに動いてるもんなんだな……って、こうなる以前に働かなきゃ意味ないって）

ひとり掛け合いを脳裏で展開しつつ、ウォルセンは差し出されたティーカップを口に運んだ。

この部屋は、精霊たちの好意に溢れていて、なにひとつ警戒する必要を感じなかったのだ――後にこれが大間違いだと知るわけであるが。

少なくとも、家を出て一年近く、常に緊張を強いられてきたウォルセンにとって、この部屋の空気はこの上なく安心できる、心地良いものだったのだ。

（多分、これは……この女性のせいだな……）

久しぶりに口にする上等な紅茶を味わいながら、ウォルセンはそっと正面に座る老婦人に目を向けた。

銀髪にやわらかな藤色の瞳を持つその女性は、そばにいるだけで包み込まれて癒されるよう

な、やさしい空気を纏っている。

（このひとは、凄く精霊たちに愛されてる。きっと豊かな人生を歩んでらしたんだろうな……こんな状況じゃなかったら、いろいろお話を伺いたいぐらいだけど……）

逃亡中の身に、それは無理だ。

本当なら、すぐにでもこの宿から遠ざからなければならないところなのだ。

大変な権力を持つ実家は、政界財界に広い繋がりを持っている。もしもつきあいのある誰かにこの顔を見られたら、すぐにでも話は本家に伝わってしまう。そういう意味で、ウォルセンにとってこの『白鷺館』はエアラン中でも一二を争う鬼門なのだ。

だというのに――。

「うちの娘がご迷惑をかけてしまいましたね、本当に申し訳ないわ。許してくださるかしら？」

穏やかな声からは、ナルレイシアに対する溢れんばかりの愛情が窺える。

こんな女性に大切にされているから、彼女はあんなにも真っ直ぐで眩しいほどの輝きを放っているのだろう、と思う。

愛されて育った者は、それだけで強さとやさしさを心に育むことができるのだから。

（まあ、ちょーっとばかり、ひとの話を聞かないあたりは問題ありだけど……）

それでも、あの正義感は褒めるべきものであり、決して責めるべきものでは……。
ない、と考えかけていたウォルセンは、そこではたとあることに気づいた。
（いや、待て待て、ちょっと待て。あの男前な言動や見事な身のこなしで誤魔化されてたけど、本来女の子がひとりで大の男を追いかけるってのは無謀じゃないか!?　感心するところじゃないぞ、絶対！　なのになんでこのひとは、そのことをあっさり流してるんだ!?　孫娘のとんでもない行状を、実は知らないとか……？　いや、そんなはずはないぞ、だってさっき、アゼルフィアって女の子が、とうとうと武勇伝を語って聞かせてたし！）
今更であるが、ここにきて初めて、ウォルセンは三人の女性達の言動の不思議さに気がついた。
大の男相手に立ち回りを演じる美少女。
そのことを『無茶しないで』で窘めながら、他人には自慢げに話して聞かせるこれまた標準以上の美少女。
その話を笑いながら聞いて、さらりと流す上品な老婦人。
はっきり言って変である。
（いったい、なにやってるひとたちなんだ……？）
ここに至っても警戒心は覚えなかったが、疑問符は脳裏を埋め尽くすほどにこんこんと湧き

出てきた。

しかし、それを口にするより先に、老婦人がにこやかに話しかけてきた。

「本当にごめんなさいね……お針が得意でらっしゃるのよね？　もしかして、それをお仕事にしていらっしゃるのかしら……？」

どこまでも柔和な空気に、うっかりうなずいたウォルセンは、一瞬（しまった）と思ったのだが、つづく老婦人の言葉にほっと安堵の息を洩らした。

「ああ、ではあの見事な肩掛けは、あなたの手によるものなのね？　素晴らしい腕をお持ちなのねえ……なのに、あんなことになって……本当に申し訳ないことだわ」

褒められて悪い気分はしなかったが、同時に力作の肩掛けを襲った惨い現実を思い出し、ウォルセンは思わず俯いてしまった。

「宿のひとに頼んで、染み抜きをしてもらっているのだけれど、もし元に戻らないようであったら、買い取らせては貰えないかしら？　どこかの工房との約束があるのだったら、わたしからそちらに事情を説明して、弁償金も払わせていただきますから」

願ったりかなったりの申し出である。

本音を言えば、一も二もなく飛びつきたいところだった。

だが、なにかが……どこかが引っかかる。

このひとたちが、自分のことを知っているとは思えない。だが、この『白鷺館』の最上級の部屋を借りるような相手なのだ。この先、実家の誰かと知り合わないとも限らない。さらにその上で、自分のことを何気なく話題に出さないとも……。

そんなとき、彼女たちに自分の連絡先や雇用主である工房のことを尋ねる者がいたとしたら……それこそ一大事だ。

杞憂かもしれないが、なにがどう転ぶかわからないのが人生というもの。

実際、生まれながらに妙な痣を持っていたせいで、周囲から勝手に人生を決められてきたウォルセンは、晴れて自由の身となるために、これ以上欠片とても不安要素を抱え込むつもりはなかった。

（ああ、さよなら……久々の肉……）

心で大いに泣きながら、彼はしっかりとかぶりを振った。

「いえ、どうかお気遣いなく……」

言いながら、思わず涙がこみ上げそうになったが、なんとか我慢した。

空元気も元気の内なら、やせ我慢だって立派な我慢の内なのだ。

ファティ・リンシャと女装の男性が、一見和やかな、そのくせ気にかけてよくよく観察してみれば、実は結構な駆け引きを繰り広げているのがわかる一幕を、すぐそばで目にすることとなったナルレイシアは内心唸っていた。

（うーん、手強い）

ファティ・リンシャの巧みな話術に引きずられることなく、先ほどから手がかりのての字も晒そうとしない相手――ディーシア、と名乗ったのだが、恐らくは偽名だろう――の強かさに、彼女は正直なところ舌を巻いていた。

はっきり言って、ファティ・リンシャの話術は魔法に近い。

彼女の持つ、相手を包み込み癒すような包容力たっぷりな空気と、わざとらしさをかけらも感じさせない話運びにかかっては、大抵の相手は一溜まりもない。

抱え込んでいた秘密を意識せずに告白し、さらにはそれに関わる鬱屈まで吐きだして、どういうわけか最後には慰撫されてすっきりし、彼女の信奉者になる……というのが、これまでほぼ例外なくナルレイシアが目撃してきた事の運びだったりする。

だというのに、ディーシアは流されないのだ。引きずられないのだ。

これだけで、すでに常人ではあり得ない。

（うわぁ、いくら編み物の件で呆然としてたからって、あんな強引なやり方で、わたしったらよくここまで連れて来られたものだわ。普通の状態だったら絶対、引っかける前に逃げられたに違いないわー）

思い出すだに冷や汗が出る。

なにしろ自分は、一刻も早く『翠唱子』の半身かどうかを確認するために、かなり強引に強引をかさねた方法で彼――確証はないが、ナルレイシアとしては確信している――を引き留めたのだ。

まず、逃げ出せないように染み抜きと称してドレスを脱がせ、室内用長衣に着替えさせて、お茶を振る舞う一方で、「お詫びさせてください！」と必死に訴えかけて、なんとか『翠唱子』に触らせようとしたのだ。

ところが、ディーシアと名乗る相手は、とことんこちらの申し出を固辞し、ついには「申し訳ありませんが、実は金属にかぶれる体質なので」と、嘘だと思っても確認するわけにはいかない理由を持ち出してきたのだ。

あくまで『お詫び』である以上、相手の害となるものを押しつけるわけにもいかず、それ以上どうしていいのか攻めあぐねていたところで、ファティ・リンシャが素知らぬ顔で割って入ってくれたというわけなのだ。

が――。

それもまた、膠着状態に陥りつつある。

（ああ、もうっ！　こうなったらいっそのこと、『翠唱子』投げつけて反応見てみたいぐらいだけど！　でも、本当に金属にかぶれる体質だったら笑い話じゃすまないし……ああぁ、なんて面倒なのぉっ!?）

そんなジレンマに陥りかけていたナルレイシアに救いの手を差し伸べたのはファティ・リンシャだった。

が、老婦人の告げる言葉は、彼女の思惑を大きく裏切るものだった。

「ナーシア。そろそろディーシアさんのドレスの染み抜きも終わっているころでしょうから、引き取っていらっしゃい」

「え？　あ、そうですね……染み抜きだけなら、確かに……でも、濡れてたし……」

見るからに、ディーシアはドレスに着替えるなり「それではさようなら」しそうな雰囲気なのである。

ナルレイシアとしては少しでも長く足止めしたいところなのだが……ファティ・リンシャの無言の圧力が、そう主張することを許さない。

「そのことなら、問題ありませんよ。アゼルフィアには火熨斗を借りて乾かすように言いまし

たからね」

確かに、火熨斗を使えば、乾かす時間を短縮できる。

（でも、でもぉ、ファティ・リンシャ……。それじゃあ、なんのためにこのひとを引き留めたんだか……）

訴えかけたいことは山ほどあったけれど、世界最長老柱神の無言の微笑みを前に、抵抗などできるはずがない。

ましてや口より雄弁な眼差しが「急いては事をし損じますよ」――と告げていたのだ……逆らえるはずがなかった。

（ああ、でも当たりっぽいか、外れっぽいかぐらいの見極めはつけたかったなぁ）

などと思いながら、肩を落として宿の階段をとぼとぼと下りていたナルレイシアは。

「ヴィル・ダカール？」

不意に掛けられた、心底こちらを案じるような声に目を瞠った。

「どうなさったのです、悄然として」

声のした方に目を向ければ――階段の途中に、掛け替えのない『本の虫』同盟の同志である青年の姿があった。

「スカーさん！」

叫ぶと同時に抱きついた。

そうしてナルレイシアは自分では解決できない問題のあれこれを、事細やかに――抱きついたまま――訴えかけたわけである。

傍目には、眼福でしかない取り合わせであるこの二人の間に、実のところ同志愛という名の揺るぎない感情以外存在していないことは……彼らにごくごく身近な者達しか把握できていないことだった。

やがて、話を聞き終えたスカルトードは、ありがたい助言をくれた。

「そういうことなら……こうしてはどうでしょう？」

告げられた内容に、ナルレイシアの瞳はきらきらと輝いた――。

（ああ、やっと帰れる……）

乾いたドレスを手渡され、洗面室で着替えながらウォルセンはほっと息をついた。

室内用長衣のままでは部屋から出ることも出来ず、どうしようかと思っていたから、ドレスが戻ってきて、心底助かったと思う。

肩掛けの方はまだ染み抜きの途中だという話だったが、ほとんど絶望的だろうから、諦める覚悟はあった。材料費と工房に支払う違約金を考えると頭が痛いが……これもまた諦めるしかない。

（あー、しばらくはまた、野菜屑スープの日々かな）

当分つづくだろう貧しい食生活を思うと涙が出そうになるが……仕方ない。

ない袖は振れず、ない金は出せないのだから。

（せ、切ない……）

思わずため息が洩れてしまう……が。

（えーいっ！　ぐずぐず悩まない！）

自身に活を入れて、ウォルセンは素早くドレスに着替えた。

後は早々にここを辞すればいい――そう、ここに長居するのはある意味危険だと、ウォルセンは気づいていた。

老婦人の醸し出す空気があまりに心地良いがために、ウォルセンはすでに大きな失敗を犯してしまった。

問われて思わず口にした名――ディーシアは紛れもなく彼の本名のひとつなのだ。いつもは女性の姿のときは『セーン』と名乗っているというのに、ぽろり、と出てしまったのだ。

これ以上、あの老婦人と話していては、またなにを洩らすかわからない。
それはあまりにも危険だ。
（よし、さっさと帰る！）
そして、数日は部屋に閉じこもって、万が一にもあの少女たちと顔を合わせないようにするのだ。
そうすれば、二度と会うことはないはず――旅行者らしい彼女たちは、明日か明後日にはこの街を出て行くであろうから……。
とにかく、それで危険は回避できるはずだ。後はなるべく早く、エアランを発つよう準備をして……資金不足は否めないが、なんとかするしかないだろう。
そこまで考えたところで、洗面室の扉が控えめにノックされているのに気づいた。
「ディーシアさん？　大丈夫ですか？　ドレス、きちんと乾いてましたか？　まだ濡れているようでしたら……」
ナルレイシアの気遣うような声に、ウォルセンは「いいえ」と答えた。
そうして――。
辞去の言葉を口にするために、洗面室の扉を開いた、まさにそのとき――。
廊下側の扉が、勢いよく開いた。

飛び込んできたのは、貴族的な整った顔立ちの青年である。
「この猿娘っ！　お前はおとなしく買い物ひとつできないのか!?　往来で大立ち回りを演じるなど……それが年頃の娘のすることか!?」
怒りに震える声で、あまり貴族的でない台詞を口にする青年を、しかしウォルセンは凍り付いたように見つめていた。
「ガスカール！　お客さまがいらっしゃるのに失礼でしょ！」
ナルレイシアが窘めるように言うが、その声すらウォルセンの耳には入らなかった。
彼の目は、ガスカールと呼ばれた青年の髪と瞳に釘付けにされていた。
（黒髪に、紫の双眸……そして、ガスカール……）
間違いない。
（エルスカーネ公爵……だ！）
ウォルセンの緑味の強い榛の瞳が恐怖に染まった。
シャラン――と。

どこかで鎖がぶつかりあったような、澄んだ音が聞こえたような気がした。決して関わってはならない人物と、自分が出会ってしまったことを、ウォルセンはそのとき初めて知ったのである。

10

「ガスカールの馬鹿ぁ……」

テーブルに突っ伏し、ナルレイシアはさめざめと泣いて……いるふりをした。

しかし、詰る声に宿る響きは嘘ではない。

「せっかく引き留めて、これから確認作業に入るところだったのに……！」

説明不足も甚だしい彼女の台詞に、果たして黒髪の青年は整った顔に疑問符を貼り付けた。

ただし、誰も自分の援護をしてくれないことから、どうやらまずいことをしたらしいことは感じ取ったのか、ナルレイシアへの態度はいつもよりは柔らかいものだった。

「……もう少し、わかりやすい言葉で話してくれないか？」

……ただし、いつもがいつもであっただけに、客観的にはやさしくも柔らかくも見えない。

仕方ないなとでも言いたげに、スカルトードが助け船を出した。

「さすがはヴィル・ダカールといいますか……早速街で『翠唱子』の半身候補を見つけてここ

まで連れこ……いえ、連れてらしたんですよ」

この言葉に、さすがに驚いたのか、ガスカールが紫の双眸を驚きに瞠らせた。

「早いな」

半ば呆然とした口調でつぶやくのに、スカルトードとファティ・リンシャがうなずいた。

「ヴィル・ダカールですからね」

「ナーシアですもの」

果たして素直に褒め言葉と受け取っていいものかどうか、微妙な台詞である。

「連れてきたはいいけど、かなり警戒心ばりばりで、『翠唱子』をどうやって近づけようか、さんざん悩んでたのに……せっかく、スカーさんが助言してくれたのに……もうちょっとだったのに……」

テーブルから顔を上げ、恨みがましくガスカールを見上げてくる彼女の左手首には、いつもはない装飾品があった。

銀の土台に、緑の石が嵌めこまれた——珍しくもない意匠のものだ。

が、それを目にしたガスカールは小さく首を傾げた。

「珍しいな……お前がしゃれっ気を出すとは。そんな腕輪、いつ買ったんだ？」

大概失礼なことを口にする男である。

「あなたねえっっ！」

がばっと身を起こしたナルレイシアは、思いっきり無礼発言をした青年を睨みつけた。

「どこに目をつけてるのよ!?　これは『翠唱子』に決まってるでしょ!?　どんなに言っても手にとって貰えそうになかったから、わたしがはめて、うまいこと触らせるつもりだったの！　それで反応があるかどうか確かめるところだったの！　なのに、あなたがすごい剣幕で怒鳴り込んできたものだから、ビックリしてあのひと帰っちゃったじゃないの！」

連絡先も教えてもらってないのにぃぃ――。

再びテーブルに突っ伏した少女に、ガスカールは怪訝そうに首をかしげた。

「あー、反応なら、していると思うが……」

珍しく厭味を交えずに指摘するあたり、彼としても多少は悪いと思っているのかもしれない。

……だが、拗ねたナルレイシアはそんなことには気づかない。

「無責任なこと言わないでよ」

手首に目を向けもせずに、素っ気なく言い切る彼女の態度に、さすがにガスカールが機嫌を損ねた顔になった。

ふたりきりであったなら、すぐさま口喧嘩に突入していたに違いないが、幸いにも室内にはほかにふたり同席者がいた。

「ヴィル・ダカール、確かに『翠唱子』は姿を変えてますよ？」
「そうよ、ナーシア。見てごらんなさい、意匠も変化しているし……もしかして、石の輝きも変わっているかもしれないわ」
スカルトードとファティ・リンシャ――ふたりともに促された格好で、自分の手首に目を落とした彼女は、次の瞬間、目を丸くした。
「本当だ！　触らせたわけでもないのに……あ、石も！　明度が上がってる……っていうか、まるで別の石みたい！　明るい緑で……でも透明度は低いから、翡翠……？」
「神宝に嵌められた石は、正確には石ではありませんからね。近付いてそれだけ顕著に反応したということは、かなり可能性は高いと見ていいわね」
「そうですね。なにしろ大伯父のときは、耳飾りだったものが首飾りに変化したという話ですし……触れたら、もっと変わるかもしれませんね」
ファティ・リンシャとスカルトードの言葉に、ナルレイシアがぱあっと顔を輝かせた。
「え、え!?　それじゃあ、ほぼあのひとで決まりってことですか!?　もう一度しっかり確認したら、晴れて二人目決定!?」
うわぁ、夢みたい――。
心からの嬉しそうな笑顔で、ナルレイシアがつぶやいた。

なにしろ前回が前回である。殺されかかるまでは行かずとも、もっと手こずる展開になることを半ば以上覚悟していただけに、これは嬉しい誤算だった。

だが、そこではたと気づく。

「っって！　連絡先知らないんじゃ、押しかけるわけにもいかないじゃない！　うわぁん、やっぱりガスカールの馬鹿あぁっっ！」

落ち込んで、浮上して、浮かれて、またしても落ち込む――ナルレイシアの感情は非常に目まぐるしい。

しかし、そこに再度救いの手が差し伸べられた。

先ほどから、その役目は銀髪の老婦人と緑がかった金髪の美青年に独占されていたのだが、今回もそれに変わりはなかった。

「そんなにがっかりしないで、ナーシア」

やさしい慰撫するようなファティ・リンシャの言葉に、涙目になりながら「だって、だってぇ、ファティ・リンシャ……ぁ」と声を上げれば。

「大丈夫ですよ」

にっこりと、老婦人は慈愛に満ちあふれた笑顔で告げた。

そうして、差し出されるのは、ガスカールの登場に動揺しまくり、逃げるように部屋を飛び

出していったディーシアの忘れ物――アゼルフィアが一所懸命頑張ったものの、結局泥のしみを完全に落とすことはかなわなかった絹糸で編まれた繊細な肩掛けだった。

「あの子の手編みでしょうね……気配が強く残っているから精霊たちに尋ねれば、すぐに居場所ぐらいは教えてもらえるわ。ね？」

ただ、このままじゃああの子に返しても喜んではもらえないでしょうから――。

小さく首をかしげながら、なにやら思案顔になったファティ・リンシャは、にこやかに空中に向かって『頼み事』を口にした。

「お願い、あなたたちも、あの子のことは気に入っているのでしょう？　これが元通りになったら、少しはあの子の食生活も豊かになると思うのよ。協力してくれるでしょう？」

いったい誰に対しての言葉なのか――そんなことを疑問に思う者は、この場にはいなかった。

ファティ・リンシャは柱神であり、柱神は精霊たちから限りない親愛を捧げられた存在なのだ。

たとえ、頼み事の内容が染み抜きであろうと、精霊たちが喜んで応じないわけがなかった。

小さいが、確かに奇跡としか呼びようのない光景が、彼らの目の前で繰り広げられる。

繊細な編み目に入り込んでいた細かい泥の粒子が精霊の力によって綺麗に排除され、水分は

あっという間に宙にとけ込む。

急速な乾燥にも拘わらず、編み目は柔らかいままだった。

見事な神業――否、精霊技である。

「……随分がっかりしていたようですもの、これを手みやげに持って行けば、少しは隙も生まれるでしょう。その機を逃さず最終確認をすればいいのじゃないかしら？」

にこにこにっこり。

一見穏和な老婦人にしか見えないファティ・リンシャは、しかしさすがに最年長柱神――海千山千の強者だった。

しかし当然のことながら、この場でそのことを指摘する者はいない。

「ありがとうございます、ファティ・リンシャ！」

ふんわりなめらかな肩掛けを抱きしめながら、このまま飛び出しそうな勢いのナルレイシアを止めたのはスカルトードだった。

「ヴィル・ダカール。こんなに早くに足を運んでは、いらぬ警戒心を彼に抱かせるだけですよ。染み抜きと乾燥の時間の短さを不審がられてますます頑なにさせかねない。逸る気持ちはわかりますが、ここは一晩待ってはどうでしょう？　それと……その、茶葉の包みが見あたらないのですが……」

言いにくそうに告げられた内容に、ここで初めてナルレイシアは目的の茶葉を買いそびれたままだったことを思い出した。

「そうよ、お茶の葉！」

まだ買ってない！

両手を頬に当てて叫ぶ彼女を、スカルトードは穏やかに促した。

「夕方とはいえ、まだ陽が落ちるには時間があります。折角ですから、今度こそ見物がてらにアゼルフィア嬢と一緒に街に出てはいかがです？　ついでで構いませんから、その際、薄荷茶も買ってきていただけるとありがたいのですが……」

遠慮がちな頼みに、すぐさまナルレイシアはうなずいた。

「はい、わかりました。薄荷茶ですね！」

元気よく答えた後、彼女は少しだけ目線を泳がせながら、「馬鹿馬鹿」発言を繰り返していた相手に問いかけた。

「え……えっと、ガスカール？　なにか欲しいものがあるならついでに買ってきてあげてもいいけど……？」

顔が、心なし赤いのは……照れているせい。

八つ当たりしてしまった自覚はさすがにあったのだ。

対する青年は「別に……」と言いかけた時点で、なぜか息を呑んで言葉を切った。
ファティ・リンシャとスカルトードから非難囂々な視線を浴びせかけられたからである。しかし、明るい希望を見いだしたナルレイシアは当然気づかない。
「……では、カミツレ茶を」
力なく絞り出された要望に、「わかった、カミツレ茶ね」と答え、ナルレイシアは財布を手に、足取りも軽く部屋を出た。
彼女の心は、現在どこまでも晴れ渡った空のように澄み切っていた。
明日になれば、ふたつ目のお役目から解放されるのだ。
（ああ、三つ目も四つ目も、この調子でさくさく片付くといいなぁ……全部終わったら今度こそ、誰にも邪魔されることなく、本に埋もれて浸る毎日……ああ、幸せ過ぎる……）
夢を見るのは誰しも自由だ。
ナルレイシアが儚い夢から醒め、己が呪わしい体質を思い出すまで——もう少しだけ、幸福な時間は許されていた。

さて。

若輩の少女ふたりを体よく追い出した『白鷺館』の最上階の一室で、先ほどまでの和やかというか明るいというか軽いというか……まあ、そんな空気が綺麗に払拭された空気のなか、一番に口を開いたのはエルスカーネ公爵ガスカールだった。

「それで」

と、慎重な口調で養い親の片割れである老婦人に問いかけた。

「わざとあの猿娘を浮上させて、外に放り出したということは、事態は単純ではないというわけですよね。それはわかりましたから、せめて詳しい事情を教えてくれませんか？」

ガスカールは、実のところ疲れていた。

エルスカーネ公爵家の領地は広い。更に先々代が事業のあれこれにも手を伸ばし、しかもそれなり以上の成果を上げたものだから、転がり込んでくる問題はかなり多い。

今日、あの災難吸引器である少女のそばを離れざるを得なかったのも、そのせいだった。

経営権を持つある商会の主が面会を願い出てきたのだ。

ガスカールとしては、あくまでファティ・リンシャの連れとして、黙って静かに通り過ぎたかったのだが、商売に携わる者たちの情報網というものは侮れない。

しかも根性は筋金いりなものだから、面会を断ったあげくにどこまでもつきまとわれるより

は、いっときでも付き合ってやって満足させた方が楽だ、と考えた彼に罪はない。

あくまで、普通であれば。

ただ、彼がお目付役としてくっついている少女は、まかり間違っても『普通』とは縁遠い体質の主だった。

生まれて十七年の間に、普通であればあり得ない状況で――例えば高波に攫われて岩で足をざっくり切って半日以上行方不明だったとか、夏の山で雷のほとんど直撃を受けて心臓が止まった状態で発見されたのに無事息を吹き戻したのだとか、やはり夏の山を散策中に鉄砲水が原因の土砂崩れにまきこまれ、二日間生き埋め状態だったにも拘わらず生還をはたしたのだとか――とにかく「なぜそれで生きているんだ!?」と叫びたくなるような前歴の持ち主なのだ。

目を離したが最後、なにをしでかすか、どんな騒ぎに巻き込まれるか知れたものではない。

わかってはいても、ガスカールとしては……信じたかったのだ。

少女のそばには自分だけではなく、重石役となってくれる人間がふたりいて、しかも現在は彼女が騒ぎに関われば、無条件に一緒に巻き込まれる年下の少女――アゼルフィアがいる。

こうした状況であれば、たかが一時や二時自分がそばから離れても、大変なことは起こるまいと――。

大変な読み違いだったことは明らかだが。

ずきずきと痛む頭を抱えながら、ガスカールはことの詳細の説明を、スカルトードとファティ・リンシャに求めたわけである。

「まあ……きっかけは、あなたが耳にしたという大立ち回りね。引ったくりを追いかけてる途中で、あの娘ったら何人かにぶつかったらしくて……それでも倒れて水たまりに尻餅ついたのはディーシアだけだったみたいだけど」

……心なし、頭痛が酷くなった。

「ところが、さすがにナーシアというべきでしょうね。ディーシアの周囲に、あの娘特定のきらきらぴかぴか世界が展開してるのが視えたんですって」

ファティ・リンシャが言わんとしているところは……恐らくわかる。

異能者を見分ける自らの力を説明するとき、ナルレイシアは『光』として表現するのだから……恐らく彼女の目には、そう映っているのだろう。

自分の鼻が、現実に漂いもしない『香り』や『匂い』を認識することで異能力者を見分けるのと同様に。

そして、新たな柱神となる者は、そういった異能を持っていることが多い。

つまり、数日前まで滞在していたセルフィアの街で、偶然ナルレイシアの手元に転がり込んできた緑の神宝『翠唱子』の半身たる存在……少なくともその候補と呼べる人物を、このエア

ランに到着するとほぼ同時に見いだしたというわけだ。
よりにもよって、目付役ふたりがそばにいない時を見計らったかのように！
……そうして、連れてきたのは、女装した青年。
そういう趣味の持ち主なら、まだしも問題はなかったろうが、地味に地味を重ね、とことん目立たぬように振る舞っていたと聞いては、それが趣味などではないのは明らかだ。
身を隠すために、己の性別すら偽る必要性を抱えた人物だということだ。
そんな相手に、だ。
ナルレイシアが夢みているような展開が期待できるとはとても思えない。
『おめでとうございます、あなたは神宝『翠唱子』に選ばれた、新たな柱神さまです！』
先ほどの浮かれきった様子を思い出すだに、これくらい能天気なことは言いそうだと確信できるだけに、その先のことを思うと……重いし痛い。
「や……ですが、家出程度の家庭の事情なら、問題の解決は難しくはないでしょう？」
その言葉は、縋り付く先を求めてのものだと……半ば自覚していた。
それでも、認めたくないことはあるのだ。
（一年前の大騒ぎに続いて、またしても……!?）
だなんてことは。

絶対決して認めたくないことだった。

が、しかし。

運命というものは、時に残酷なまでに非情である。

ファティ・リンシャが、困ったような苦笑を浮かべてこう言った。

「……だったら、良かったんでしょうけど、ねえ……？」

不吉な予感が確信に変わった瞬間、ガスカールは自身の寿命が確実に縮められる未来を目の当たりにした、と思った。

11

「どういうことだよ、これは」

エアランの街を歩きながら、リーイン・ル・ファンは呆然とつぶやいた。

（なんの冗談だ？）

現実だと頭は理解しているが、どうにも信じたくなくて彼は何度もかぶりをふった。

エアランの宿に落ち着いたのは昨日の夕方のこと。

危険な質を取り戻すために、早々に依頼を果たすべく、朝から街を歩き回った彼は、確かに特徴的な気配の名残をあちらこちらで感じ取った。

強いくせに柔らかな、なんとも表現しがたいその気配――そんなものを纏った人間に、リーインはこれまで出会ったことがなかった。

依頼主が、一度感じ取ればわかる、と言っていた意味がわかった。なるほど、ここまで独特な気配なら、間違いようがない。

（これなら二、三日捜せば見つかるかな……？）

どれほど姿を変えようと、気配までも違えることは出来ないだろうから、それは容易いことに思えた。

……本当に、ついさっきまではそう思っていたのだ。

ところが。

ところが、である。

ほんの先ほど——昼を過ぎて間もなくのこと。

エアランに突然、強烈な気配が新たに四つも現れたのである。

はっきり言って、素人ではありえない強さと輝きを放つその気配のせいで、辿るべき気配は霞んでしまった。

そもそも追っていた手がかりは残り香のようなものだっただけに、こうなってはお手上げである。

（どこの組織のご一行さまだよ、まるで見計らったみたいに、こんなタイミングでやって来るんじゃねえよ）

ひとの迷惑考えろ——。

身勝手なことを考えながらリーインはぼやいた。

「あー……ったく」

黒髪をがしがしとかき乱しながら、彼は空を仰ぐ。

（一応、どんなやつらか確かめておかないとなー。気配を隠そうともしてない以上、別口の方に雇われたってわけじゃないだろうけど、どこかで鉢合わせしても面倒そうだし）

それにしても、とため息が、洩れる。

「何だってこんな派手な気配のやつばっかり集まったかねえ。類は友を呼んだのか……やっぱ、チームでも組んでんだろうな。隠密仕事には絶対向かないだろうから、表の世界の術者かなんかだろうけど……あーあ、ほんっと、迷惑なこった」

おかげで最初から調べ直さないといけない羽目に陥り、リーインの機嫌は急降下していた。いっそ嫌がらせのひとつもしてやろうか、などとろくでもないことを考え始めた彼の耳が、聞き覚えのある声を拾ったのは次の瞬間のことだった。

「おじさーん、岩茶と薄荷茶とカミツレ茶下さいなー」

朗らかな少女のそれに、思わず振り返ったリーインは——思いがけない姿を認め、「げっ」と呻いた。

そのまま、物陰に身を隠すなり、彼は頭を抱えこんだ。

「なんで……」

茶葉を扱う店に入って行った少女の横顔には、いやというほど見覚えがあった。
特徴的な髪型のせいばかりではない。
「なんで……選の巫女がここにいるんだ……っ!?」
（すると、ほかの三つの気配のうちのふたつは、紫公爵と御柱さまの縁者兼影っていう男だな。まさかとは思うが、御柱さままで一緒なんじゃなかろうな……？）
図らずも気配の主の正体を知ることとなったリーインは、はあ、と息をつきながらその場にしゃがみこんだ。
今回の仕事が順風満帆に進みそうにないことを、このとき彼は確信した。

エルスカーネ公爵ガスカールは、ディエーンにおいて有名すぎるぐらいに有名な青年である。
黒髪に紫の瞳という、前王家エルスカーネ家直系の特徴をそっくり受け継いで生まれて来た彼は、幼いころから良い意味でも悪い意味でもひとの注目を集めてきた。
恐らくは彼が原因で命を落としたとされる前公爵夫妻の死後、彼は当代柱神であるアマンシ

ールの実質上の養い児として、王家と友好的な関係を築いてきた――そう言われている。
そして、その一方で――。
（うちとは……非友好関係にある……）
はっきりとは敵対していないが、彼がウォルセンの実家を問題視していることは確かな事実だった。
いや、正確を期すなら、彼というより王家が、と言うべきか。
（まずい……）
面識はない。
おまけに会ったときの自分の格好が格好だ。
素性が知られた心配はしなくていいだろう。
それでも、彼と会ってしまったのは、あまりにも危険なことだった。
（なにか不審を買うようなことは言わなかったか、おれは？　あの女性の話術に乗せられて……いや、大丈夫だ。ディーシアの名は一族でも一部の者しか知らないし、おれの存在自体、隠されてたようなものだから……）
大丈夫だ――大丈夫なはずだ、と。
必死に自分に言い聞かすが、ウォルセンの動悸は鎮まらない。

突然襲ってきた不安と恐怖はあまりにも大きく、ウォルセンは寝台のなかでまんじりともできずにいた。

（まさか、紫公爵が来ているだなんて……よりにもよって彼の連れと知り合うだなんて……タチの悪い冗談みたいだ……）

身体の震えが止まらない。

息をするのも苦しいぐらいだ。

（公爵の目的はなんなんだ？　物見遊山とは思えないけど……でも、連れの彼女たちの様子だと、仕事とも思えない……ああ、でもこんな時期に、この街に立ち寄るなんて、普通ならあり得ない……なにか、水面下で動いてるのか……？）

驚きのあまり、逃げ出して来てしまったが、せめて少しは話を聞いておくべきだっただろうか。

いや、とすぐにかぶりをふる。

（それは危険だ……）

危険視され、冷遇されても不思議ではない状況下にあって、ガスカールは王家と良好な関係を保持している。

柱神の後見があるとは言っても、それだけで安穏としていられるほど宮廷の世界は甘くはな

いはずだ。彼は確かに厳しい世界を生き抜くだけの力を持っている。
その能力は侮っていいものではない。
やはり近付くべきではない。
（それどころか……もう、この街にいちゃいけない）
彼の不審を買ったか否かはこの際関係がない。
エルスカーネ公爵の動向に、常に目を光らせている人物がいるということが問題なのだ。
（あいつは、きっと摑んでる……）
そして、公爵の目的を探るために、配下を動かすに違いないのだ。
そんなことになっては、女装などほとんど意味がない。あっという間に自分は見つけ出され、そして連れ戻されてしまうだろう。
（アッシュ……）
一年前に別れたきりの親友の顔を思い浮かべる。
濃い褐色の髪と、翡翠の双眸を持つ綺麗でやさしいひと。
親元から離され、無理矢理連れて行かれた冷たい屋敷のなかで、たったひとり自分に手を差しのべてくれた幼なじみ——自分の意思をはなから無視する周囲への怒りで、頑なにその手を拒みつづけた自分に、何度も何度も差し出された優しい手。

拒む度に、もう次はないのではないかと怯え、けれど相手は勝手な周囲の仲間なんだからと握り返すこともできずにいた自分は、かなり扱いづらい子供だったのではないかと思う。

それなのに、彼は決して諦めず、何度も差し出してくれるその手が、涙が出るほど嬉しかった。

『……ぼくの友達になって？』

ようやく素直にうなずいた自分に向けられた嬉しそうな彼の笑顔は、きっと一生忘れない。

『ずっと一緒にいよう？』

うん、と答えた自分——約束だと指切りして。

破るつもりなど、なかったけれど、結局自分は裏切ったのだ。

（ごめん……アッシュ、ごめん……）

本当は、ずっとそばにいたかった。

彼の望むまま、自分もまたそれを願っていたから。

（でも、駄目なんだ。おれがそばにいたら、周りはお前を認めない……そんなことは許せないんだ。だからごめん……もう、会わない。お前も、もうおれのことは捜さないで……お願いだから）

祈るように、思う。

脳裏（のうり）に浮かぶ親友は、ウォルセンのわがままになにも答えない。
眠れない夜が明けるころ、彼は寝台から起き上がった。
荷物を処分するために。
自分の痕跡（こんせき）を完全に消し去り、そうしてこの街を出て行くのだ。

12

ナルレイシアはこの上なくご機嫌だった。

理由は言うまでもなく、今日にでもふたり目の柱神捜しが終了するかもしれないからである。

朝食を終えるなり、浮き浮きしながら宿を出た。ディーシアに会いに行くのだ。

（この肩掛けを届けに来ましたと言えば、無下にはされないだろうし、ちょっと時間を貰って、確認作業をすませて、当たりだったら男性の姿で宿に来てもらって、アゼルフィアに見届けてもらったら無事終了ー。ああ、ディーシアさんがどうか当たりでありますように）

因みに彼の住所は精霊たちに――ファティ・リンシャ経由で――教えてもらった。

少しわかりにくい場所ではあるが、道順はしっかり頭にたたき込んだ。下準備はばっちりである。

（ファティ・リンシャのお力万歳。きっと今日は忘れられないいい日になるわ）

ふんふんと鼻歌まじりで、足取りも軽くナルレイシアは歩く。
本当はアゼルフィアも一緒に連れていくところなのだが、彼がまたドレス姿だった場合を考えて、宿に残ってもらったのだ。
くしゃみをしたのをこれ幸いと、「風邪を馬鹿にしちゃ駄目よ！」と言いくるめて寝台に押し込んできたから、こっそりついてくる心配はない。そのあたりはファティ・リンシャに頼んであるから抜かりはない。
そんな彼女を祝福するかのように、空は雲ひとつなく晴れ渡っている。
（うふふー、緑の柱神さまかぁ。どんなお力を持たれるのかなー、アマンシールさまみたいに空を飛んだりなさるのかな？　それとも、緑ということで植物に関わるお力かしらん？　ああ、落ち着かれてからでいいから教えてくださるようお願いしちゃって構わないかしら……うーん、気になるわー）
まだはっきりとディーシアがそうだと決まったわけでもないというのに、ナルレイシアのなかではすでに決定事項になりつつある。
つまりそれだけ彼女は浮かれているのである。
そして、その気分に拍車をかけるような出来事がこのすぐ後に起こった。
（あー、ディーシアさん見つけたー）

頬が緩むのを止められない。

部屋まで押しかけるつもりでいたが、なんと目標である人物は街に出てくれていた。しかも、昨日とは違い、ちゃんと男性の姿で！

緑がかった栗色の髪はさらさらで、髪よりつやつやのきらきらだ。白粉を乗せずともニキビひとつない肌は世の女性の羨望を集めるに充分だ。もっとも、ナルレイシアもその手の悩みとは無縁なものだから、素直に「肌きれーい」と感心するだけなのだけれど。

やや大きめの上下に身を包んでいても、その身体の細さは誤魔化しようがない。

（なるほど、ドレス姿が違和感ないわけよね。きっと髪を伸ばしたら、ドレスなしでも女の子に間違われそう）

全然悪気なく、当人が聞けば情けなさに泣き出しそうなことを考えながら、ナルレイシアはゆっくり近付いた。

はっきり言って、昨日の姿と今日のそれでは、同一人物とは思えないほどに印象も違うわけだが、ナルレイシアは人違いである可能性を頭から否定していた。見間違えるわけがないと、固く信じて疑わない。

なにしろ、金と緑の光の粒は、いまも彼を包むように輝いているのだから。

（やっぱり今日はついてるわ！）

浮き浮きした気分のまま、ナルレイシアは青年に声をかけた――。
そして――。
「うわああぁぁっっ！」
朝のすがすがしい空気を引き裂くような、青年の絶叫がエアランの空に響き渡った。

心臓が凍り付くような恐怖を初めて味わった翌日、今度は心臓が口から飛び出しそうな驚愕というものを無理矢理味わわされた。
「な、な、な……」
（なんで!?）
ディーシアさん、と呼ばれたとき、振り向くべきではなかったのだ。
ウォルセンは心から、そのことを悔いたが、もはや手遅れである。
目の前には、昨日会った金髪の少女の上機嫌な笑顔がある。
（なんでばれてるんだ!?）
いや、気のせいだ……気のせいに違いない。

必死に自分に言い聞かせながら、ウォルセンは空とぼけた——無駄だとわかっていても、そうせずにいられないときはあるものだ。

「お、お人違いでは……？」

我ながら白々しいとわかっていても止められない。

早い話が、ウォルセンは驚愕のあまり、混乱を来していたのだ。

「いいえー、ディーシアさんでしょう？　昨日お会いしましたよね、覚えてらっしゃいます？」

にこにこ、にこにこ、少女は動じることなく近付いてくる。

「ですから……おれは……」

ディーシアなんて名前は知りません——言ってしまってから気がついた。

（彼女ではありません、と言ったらよかったのか、もしかして？　そうしたら姉弟だとかなんとかごまかせたんじゃ……）

ナルレイシアの能力を知らないウォルセンは、無駄なあがきとも知らず、必死に頭を捻らせる——もっとも混乱から立ち直れていないため、全然意味をなしていなかったが。

脳裏を埋め尽くすのは「まずい」の一語。

背中は冷や汗ですでにびっしょり濡れている。

そんなウォルセンの心中も知らず、ナルレイシアは変わらず笑顔のままだ。
「ああ、あちらの姿のときのお名前なんですね。失礼しました……それでは、いまはなんとお呼びすればいいですか？」
（ほんとーに、この娘、ひとの話を聞いてないし……）
本気で泣きたくなったが、それで事態が好転するわけでもない。
（仕方ない……白々しくてもなんでも、腹を据えてとぼけ通してやる！）
頭が回ってくれない以上、そうするほかないわけだが、この時点で、天は完全にナルレイシアの味方だった。
「ああ、そうそう。この肩掛け、綺麗に染み抜きできたんです。ファティ・リンシャは是非買いたいって仰ったんですが、工房からの注文の品だったら、お困りになるだろうって……」
はい、と差し出された包みを、ウォルセンはうっかり受け取ってしまった。
しかも、である。
「そんな……あんな泥水に浸かったのに……」
と——到底言い逃れできない失言まで口にしてしまったのだ。
（あぁぁっっ！　馬鹿馬鹿！　おれの馬鹿！）
覆水盆に返らず。

後悔先に立たず。

ウォルセンの本日の運勢は、過去最悪かもしれない。

そんな彼の様子に、ナルレイシアは得たりとばかりに笑った。背筋に冷たいものを感じたのは……汗のせいだけではない……きっと。

「それでですね、あー……ディーシアさんがまずいのなら、ディーさんとお呼びしていいですか？　ディーさんに、折り入ってお話ししたいことがあるんですけど、お時間を少しいただけませんか？」

いいですか――と訊いておきながら、こちらが答えるより先に、すでに「ディーさん」で通すことにしたらしい。

（どこまで我が道を押し通す性格なんだ……）

ここまでくると、呆れるより感心してしまいそうだ――などと、現実逃避に走りかけたウォルセンは、しかしすんでのところで正気を取り返した。

鍵となったのは、『折り入った話』という言葉。

（冗談じゃない！）

はっきりきっぱり、ウォルセンは拒否する。

「あげません！」

しかし相手もさるもの、容易く引き下がってはくれなかった。
「大事なことなんです、ほんの少しだけでも結構ですから！」
「おれには大事じゃありません！」
「そんなことないです！　きっとディーさんにも大事な話のはずです！　とにかく少しでいいから、話を聞いてください！　そうでないとわたしが困るんです！　助けると思って、是非！」
「おれ、薄情者ですから！」
「いいえ、ディーさんが薄情者のはずはありません！」
本人たちは大真面目にやりあっていたのだが、傍で聞く者にとっては掛け合い漫才以外の何物でもない言葉の応酬に、周囲の誰かが堪えきれずに噴き出した。
その音を耳で拾った瞬間、ウォルセンは自分たちが一身に注目を浴びているという、実に恥ずかしい事実に気づいた。
（ま、まずい……！）
このままでは、最悪な事態を招きかねない。
「とにかく！　おれは急いでるんです！　そういうわけで、あなたの話は聞けません！　それではさよなら！」

言い捨てるなり、ウォルセンは駆け出し、その場から逃げ出した。
「あ、待ってくださいっっ！　ディーさんっ！」
背後から、ナルレイシアの慌てた声が聞こえたが、構ってはいられなかった。
一刻も早くこの肩掛けを工房に持ち込み、代金を貰ってこの街を出なければ。
（疫病神に取り憑かれてしまう！）
大変正しい判断であった。
ただ、惜しむらくは――半日ばかり遅すぎたということだろうか。
金髪の少女の姿をした疫病神は、彼に取り憑くことをすでに心に決めていたのである。

「信じ……られない……」
ぜいぜいと肩で息をつきながら、ウォルセンは恐ろしいものを見るような目でナルレイシアを振り返った。
駆け足での追いかけっこは、寝不足がたたったせいもあり、彼の完敗に終わった。
腕をしっかり摑んで離さない少女は、さすがに息を乱していたが、ウォルセンのようにへた

りこんではいない。

「……本当……信じられない……」

もう一度つぶやいて、彼は心底からの疑問を相手にぶつけた。

「どうしてドレスで追いつけるんだ……」

着用経験のある身としては、あれは間違っても走るのに適した衣装とは呼べない、と思っている。

むしろ、転ぶために作られているとさえ思っている。

そんな代物を身につけて、どうして自分に追いつけるのか——どう考えても謎だった。

（もしかして、この娘、魔物かなにかじゃないだろうな……）

ついに魔物呼ばわりまでされたとも知らず、少女——ナルレイシアは相変わらずの笑顔で答えた。

「慣れてますから」

普通、慣れるようなことではないはずだが、もはやなにも言う気にはなれないウォルセンだった。

「……そう」

「大丈夫ですか、ディーさん。顔色が悪いですよ、もしかして昨日、あまりよく眠れなかった

んじゃありませんか？　わたしのせいですよね、本当に申し訳ありませんでした」

こちらを気遣ってくれる心根は、嬉しい。

（だけど、本当にそう思うのなら、おれのことは放っておいてほしかったよ……せめて、追いかけないでくれたら、こんなに消耗することもなかったし……）

思っても、口には出せないこともある。

ウォルセンは基本的に――本人、あまり自覚はないが――お人好しなのだ。

「……もういいよ。それより、悪いけど、本当におれ、あなたの話を聞くつもりはないから……今日中にやらなきゃいけないこともあるし」

しかし、ことこの件に関してだけは、少女も譲ろうとはしなかった。

「じゃあ、歩きながらでもかまいません。本当は、あまりひとのいる場所で話したいことじゃないですけど、お時間がないのであれば、仕方ありませんものね」

「だから、おれには聞く気はないって言ってるだろう？」

暖簾に腕押しという言葉の意味を噛みしめながら、さすがにうんざりした声で告げると、ナルレイシアは少しだけ困ったように苦笑した。

「厚かましいのはわかってますけど、わたしにも事情がありまして。怠けると神罰が下っちゃうお役目負ってるもので……すみませんが我慢してください」

口調は大真面目だが、内容はあまりにも頓珍漢だ。

（神罰だなんて大げさな……）

そうは思ったものの、ウォルセンは笑い飛ばすようなことはしなかった。

できないのだ。

それが現実に存在することを、彼は身を以て知っていた。別に我が身に受けたわけではなく、逆に助けられたようなものだが……あれは、間違いなく神の力の顕現だった。

一年前――ロスタロイドに突然現れた黄金の巨大な幻獣……。

竜とも大蛇ともつかぬあれは、確かに神気を放っていた。だからこそ、屋敷に張り巡らされていた強固な結界に綻びが生じたのだ。

屋敷から抜け出すことができたのは、まさにそのおかげだ。

だから、ウォルセンは神罰を否定はしない。だが、目の前の少女が、それに関わっているとはさすがに信じられる話ではない。

「それはすごいな。なに、あなたは選定者なの？」

あくまで冗談のつもりで口にした言葉は、しかし目の前の少女がぴきり、と凍り付いた瞬間、非常に危険なものへと変化した。

「え？　あ？　い、いいえっっ！　は、はは……ディーさんも冗談なんて口になさり……なさ

る……なさらな……ええええっと……！」

あからさまに狼狽えるナルレイシアの様子に、ウォルセンは冷水を浴びたかのような衝撃を受けた。

（まさか……そんな）

こんな少女が、柱神を見極める役目を負う『選定者』などということが、現実にあり得るだろうか。

（普通、もっと人生経験をつんだ賢者が選ばれるものだろう!?）

あり得ない。

そのはずだというのに、胸の動悸は激しくなる一方だ。

（この娘は、なんと言った……？）

自分をつかまえて、大事な話があると――確か、そう言わなかったか？

神罰が下るから、譲るわけにはいかないとも言った。

選定者にとって、神罰に関わる大切な、話。

その、意味するところとは。

（馬鹿な……そんなはずがない！）

そんな馬鹿げた……恐ろしい話があっていいはずがない。

だからウォルセンは、彼女の言うとおり、自分の言葉を冗談にすることに決めた。

「悪い。あまりあなたが大げさなことを言うものだから……だけど、冗談にしていいようなことじゃなかったね。ほんと、悪かったよ」

ああ、もう行かないと――肩掛け、届けてくれてありがとう、助かったよ。

そう言い置いて、彼は今度こそ少女から離れようとした。

「あ、いえ、だからディーさん！」

慌てたように、ナルレイシアが摑んでいた彼の腕にしがみついてきた。

必死なのだろう――すごい勢いだった。おかげでまだ笑っていた膝が、がくんと崩れ落ちる。

その結果。

「うわ」

「あ、きゃ……」

もつれるように、ふたり揃って尻餅をついてしまった。

（二日続けて路上に尻餅つくとは……）

ナルレイシアには悪いが、やはり彼女は自分にとって、限りなく疫病神に近い存在だと思わざるを得ない。

「あなたね。一日一度はおれのに尻餅つかせないといけないとでも、心に誓ってたりするわけ？」

さすがに、声が険しくなった。

「いえ、そんなつもりは……っっ！」

少女が慌てて謝ろうとした――そのとき。

なにかが空を切る音が、響いた。

次いでかしん、と硬いなにかがぶつかりあうそれ。

音のした方に目を向けて、ウォルセンは緊張に息を呑んだ。

近くの建物の石壁に、短めの矢が突き立っていた。

明らかな殺意を、まるで誇示するかのように――。

少女も気づいたのだろう、掠れた声で、つぶやくのが聞こえた。

「……まさか、残党が……!?」

聞き捨てならぬ台詞を、拾いたくもないのに耳が拾ってしまった。

（最悪……）

彼女にもまた狙われる心当たりがあるというのなら、ひとり残していくわけにもいかない。

深く息をついて、ウォルセンは彼女に問いかけた。

「動ける？」
少女は一瞬、躊躇うような素振りを見せたが、すぐに大きくうなずいた。
「動けます」
「なら、逃げるよ」
「はい」
無駄な言葉はいっさい交わさず、ふたりは素早く走り出す。
突然の逃避行は、こうして始まったのである。

あとがき

こんにちは、前田珠子です。

平成二十年の一冊目の本は、なんとか前回『空の呪縛　月の堕ちるとき』のあとがきで予告していた通りにできそうで、ほっとしております。

というわけで。

シリーズ略名『天支』こと『天を支える者　緑風に誘われ』をお届けします。

主役のナルレイシアや主要人物は引き続き登場しておりますが、今回はロスタロイドを離れての話です。

おかげでロスタロイドから離れられないひとたちが登場しませんが、代わりに新たに出会うひとたちが出てくるので大丈夫（笑）。

アゼルフィアは、最初豆台風みたいな女の子という設定にしていたのですが、巨大台風であるナルレイシアと並ばせることを考えて（収拾のつかない騒ぎが起こりそうですし）気は強い

けど、優しい気遣いの子――としたら、なんだかナルレイシアに振り回されることになってしまいました。アゼルフィアにとっては不幸な展開かも……ご免ね（笑）。

さて、もうひとりの初登場人物――ウォルセン。

まだ謎たっぷりの彼については、あまり触れられないのですが、ひとつだけはっきり言えることは……彼は『哀しすぎる（でも笑える）ひと』（ばーい担当さん）だということです。

カバーイラストでは、あんなに可愛格好よく描いていただいているというのに……すまない、ウォルセン。次巻以降は扱いも変わるから（多分。ナルレイシアがそばにいないときとか）、今回は諦めて笑える哀しいひとでいてください、と一応謝っておこう。

さてさて、タイトルからおわかりになるかも知れませんが、緑の章開幕です。ナルレイシアにとって、ふたつ目の神宝に纏わるお話です。本編だけど、新展開なので、この巻から読んでも大丈夫だと思います。

一応三冊か四冊になる予定です。

そして緑の章では巻ごとにタイトルが変わります。

次巻の予定タイトルは『緑の糸をたどって』です。

少しずつ謎が明らかになっていくはずです。でもそれがまた謎を呼んだりするわけで……タイトルは『緑風』含めて四つ用意してるわけですが、新たに考えなくてすむように、さくさく

進めていくつもりです。黄の章では登場したと思ったらあっという間に退場してしまったリーインも、緑の章では活躍（彼の場合は暗躍？）する予定ですし、テンションの高さを保ちたいです。

うーん、開幕したばかりだから、やはりあまり触れることがありませんね。

ところで、今回の執筆中、大変お世話になったものがありました。なにかと言いますと、額に張る熱用冷却シートです。別に熱が出たわけではありません。冬の暖房のせいで『頭寒足熱』ならぬ『頭暖足熱』状態になったせいです。

頭は暖まりすぎるとうまく働いてくれないので試してみたのですが、これが大正解でした。気持ちいい上、頭がすっきりしました。おかげで今回はずっと冷却シートを額に貼り付けてパソコンに向かってました。

ただ、唯一の難点は、外に出かけられないということ。追い込み時期限定で、これからもお世話になりそうです。

さて、近況です。

前回あとがきに書いた『猫の額菜園』ですが……おかげさまで、ほうれん草はすくすく育っていまが食べ頃です。お味噌汁に鍋にと、食卓に緑を添えてくれてます。

ネギはまだまだ直径一ミリほど……観察の日々はつづきそうです。ニンニクは掘って根っこ

を確認するわけにもいかないので、せっせと周囲の草むしりに励むのみ。春にはまるまるした姿を目に出来るといいなあ……わたしは揚げニンニクが大好きなのです（笑）。

今回も、挿絵の明咲トウルさまをはじめ、関係者のかたがたに大変お世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。

次は今回に引き続き、天支本編です。タイトルに偽りのない内容になったらいいな、と思っております。

それでは。

またお会いできることを願って——。

平成二十年　冬

前田　珠子

※この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などにはいっさい関係ありません。

まえだ・たまこ

1965年10月15日、佐賀県生まれ。天秤座のB型。『眠り姫の目覚める朝』で1987年第9回コバルト・ノベル大賞佳作入選。コバルト文庫に『破妖の剣』シリーズ、『カル・ランシィの女王』シリーズ、『聖獣』シリーズ、『聖石の使徒』シリーズ、『天を支える者』シリーズ、『空の呪縛』シリーズ、『ジェスの契約』『トラブル・コンビネーション』『陽影の舞姫』『女神さまのお気の向くまま』『万象の杖』『月下廃園』など多数の作品がある。興味を覚えたことには積極的だが、そうでない場合、横のものを縦にするのも面倒くさがる両極端な性格の持ち主。趣味と実益を兼ねてアロマテラピーに手を出したものの、今ではすっかり実益のほうが大きくなり、趣味とは言いがたくなりつつある。次こそは優雅な趣味を持ちたいと身の程知らずにも思っている。



天を支える者
緑風に誘われ

COBALT-SERIES

2008年2月10日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　前田珠子
発行者　礒田憲治
発行所　株式会社集英社

〒101—8050
東京都千代田区一ツ橋2—5—10
(3230)6268(編集部)
電話　東京(3230)6393(販売部)
(3230)6080(読者係)

印刷所　大日本印刷株式会社

© TAMAKO MAEDA 2008　Printed in Japan
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社読者係宛にお送り下さい。
送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。

ISBN978-4-08-601124-2 C0193

〈好評発売中〉 コバルト文庫

本好き少女の波乱万丈ファンタジー！

前田珠子 〈天を支える者〉シリーズ

イラスト／明咲トウル



- 天を支える者
- 天を支える者2
- 天を支える者3
- 天を支える者4
- 天を支える者 古戀唄
- 天を支える者 古戀唄2
- 天を支える者 古戀唄3
- 天を支える者 古戀唄4
- 天を支える者 古戀唄5

天を支える者 **罠は、蜜の味**

〈好評発売中〉 コバルト文庫

二度はないと誓った、この愛が痛い。

前田珠子 〈空の呪縛〉シリーズ

イラスト／明咲トウル

空の呪縛

『針の森』に住む美しい女柱神フィオルシェーナは、恋の誘いを頑なに断り続けていた。それは、過去の過ちを繰り返さないため…。恋獄の楔に絡めとられた女神の愛の物語！



柱神フィオルシェーナの前に、かつての恋人の生まれ変わり、ファナルシーズが現れた。運命が、二人をあざ笑う。

空の呪縛

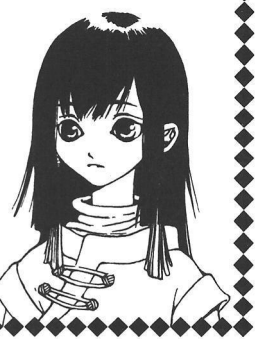
月の堕ちるとき

〈好評発売中〉 コバルト文庫

選ばれし子供たちが、世界を守る。
前田珠子 〈聖石の使徒〉シリーズ
イラスト／山本鳥尾

聖石の使徒
其は焔をまとう者
聖石の使徒
其は力を放つ者
聖石の使徒
其は天秤をかざす者Ⅰ・Ⅱ
聖石の使徒
其は水に遊ぶ者Ⅰ・Ⅱ
聖石の使徒
揺籃の瞳
聖石の使徒
蒼の組木箱
聖石の使徒
狩人の爪





〈好評発売中〉 コバルト文庫

美少年コンビが暗躍する魔性を斬る!

前田珠子

〈魅魎暗躍譚〉シリーズ

イラスト／田村由美

魅魎暗躍譚

碧眼の少年(前編)(後編)

髪と瞳の色を奪った魔性を探す甲斐。途中、行き倒れの志摩を助けたことから、没落した名家の当主・隠岐と知り合って!?



月乃守家の姫君・遠江(とおとうみ)は美少女だが相当の猫かぶり。偶然異母兄の甲斐と再会を果たすが、魔性の陰謀が彼女に迫り…!?

魅魎暗躍譚

月読見の乙女(前編)(後編)

〈好評発売中〉 コバルト文庫

選ばれし少女よ、魔性に立ち向かえ！

前田珠子 〈破妖の剣〉シリーズ

イラスト／夏門 潤



漆黒の魔性
白焔の罠
柘榴の影
紫紺の糸（前編）（後編）
翡翠の夢1～5
鬱金の暁闇1～3
女妖の街 破妖の剣 外伝①
ささやきの行方 破妖の剣 外伝②
忘れえぬ夏 破妖の剣 外伝③
時の螺旋 破妖の剣 外伝④
魂が、引きよせる 破妖の剣 外伝⑤
呼ぶ声が聞こえる 破妖の剣 外伝⑥

〈好評発売中〉 コバルト文庫

サイキック戦国絵巻、ふたたび。

炎の蜃気楼邂逅編

真皓き残響

琵琶島姫

桑原水菜
イラスト／ほたか乱



謙信の命で怨霊退治の旅を続ける景虎一行。かつての琵琶島城付近におなご武者の亡霊が現れ、景虎への恨みを口にしていると聞き…。

〈炎の蜃気楼〉シリーズ・好評既刊

炎の蜃気楼邂逅編 真皓き残響
夜叉誕生(上)(下)

炎の蜃気楼邂逅編2 真皓き残響
妖刀乱舞(上)(下)

炎の蜃気楼邂逅編3 真皓き残響
外道丸様(上)(下)

炎の蜃気楼邂逅編4 真皓き残響
十三神将

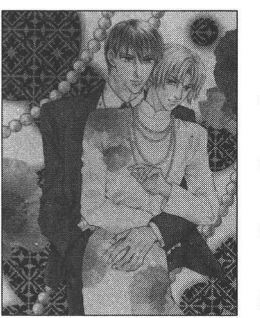
〈好評発売中〉 コバルト文庫

あなたがいない会社なんて…！

親猫の幸せな午後

あさぎりタ

イラスト／あさぎりタ



最強カップルにキケンが迫る!?　久住の子を名乗る少年が現れた!!　さらに、会社の合併で二人が離ればなれになる可能性が出てきて…。

〈芳＆久住〉シリーズ・好評既刊

猫かぶりの君1～4
夜の野良猫捜査線
親猫は愛を宿す 前編 後編
親猫は過去に惑う
親猫は恋に落ちる
猫の手も借りたいKの日常

〈好評発売中〉 コバルト文庫

結婚を決めたとたん、イオが消えた!?

聖獣王の花嫁（クロスティア）

闇水晶の檻

高遠砂夜
イラスト／起家一子



王位争いを終わらせるため、リージュは第二王子イオと本当の意味での結婚を決意。イオも喜んでいたが、突然姿を消してしまい…？

〈聖獣王の花嫁〉シリーズ・好評既刊

聖獣王の花嫁（クロスティア）
聖獣王の花嫁
剣を継ぐ姫（クロスティア）
聖獣王の花嫁
アルティナスの迷宮（クロスティア）
聖獣王の花嫁
破滅を告げる使者（クロスティア）
聖獣王の花嫁
黒衣の王女（クロスティア）

〈好評発売中〉 コバルト文庫

夢ではない、恋する想いが蘇る――
結び目が繋ぐ大正浪漫ファンタジー！

花結びの娘

岡篠名桜
イラスト／甘塩コメコ



時は大正。「リボンを結んでもらえば恋が叶う」という噂のある女学生・可也の前に、不思議な2人の青年が現われる。遠い昔の悲恋の記憶が、3人の運命の糸を結びつけて…!?

〈好評発売中〉 コバルト文庫

魔法村に、魔獣が大量発生!?

ダナーク魔法村はしあわせ日和

～ただしい幻獣の飼い方～

響野夏菜

イラスト／裕龍(ゆうりゅう)ながれ



ダナーク魔法村で恒例の大掃除の日。図書館の掃除を任された突撃魔女ビーは、魔物を封じこめた禁断の書を蹴り倒してしまい…？

――〈ダナーク魔法村はしあわせ日和〉シリーズ・好評既刊――

ダナーク魔法村はしあわせ日和 ～都から来た警察署長～

ダナーク魔法村はしあわせ日和 ～ひみつの魔女集会～

ダナーク魔法村はしあわせ日和 ～ドラゴンが出たぞ!～

ダナーク魔法村はしあわせ日和 ～いとしのマリエラ～

〈好評発売中〉 コバルト文庫

プリシラが、政略結婚…!?

姫なのに王子(プリンス)♡

～ドラゴンの森へ！の巻～

真堂 樹

イラスト／水谷悠珠



ドラゴンの血を引き、不思議な力を持つ王女プリシラ。国王が不在の国を守るためと、隣国の王子との望まない結婚を強いられて…！

〈姫なのに王子♡〉シリーズ・好評既刊

姫なのに王子(プリンス)♡ ～花冠はダレのものっ!?の巻～

姫なのに王子(プリンス)♡ ～いばらの向こうは運命の扉？の巻～

有閑倶楽部

洋館のミステリー

大人気マンガのノベライズ、第三弾！

夏休みに入り、暇つぶしに有閑倶楽部が出かけた先は、剣菱家の新しい別荘！
そこで、地元の有力者の娘を紹介されるが…？



シリーズ好評発売中！

有閑倶楽部



有閑倶楽部
史上最大の誘拐



大人気コミック
『有閑倶楽部』を完全小説化（ノベライズ）!!
大好評発売中!!

コバルト文庫

下川香苗 原作 一条ゆかり

コバルト文庫 雑誌Cobalt

「ノベル大賞」「ロマン大賞」

募集中!

集英社コバルト文庫、雑誌Cobalt編集部では、エンターテインメント小説の新しい書き手の方々のために、広く門を開いています。中編部門で新人賞の性格もある「ノベル大賞」、長編部門ですぐ出版にもむすびつく「ロマン大賞」。ともに、コバルトの読者を対象とする小説作品であれば、特にジャンルは問いません。あなたも、自分の才能をこの賞で開花させ、ベストセラー作家の仲間入りを目指してみませんか!

〈大賞入選作〉
正賞の楯と副賞100万円(税込)

〈佳作入選作〉
正賞の楯と副賞50万円(税込)

ノベル大賞

【応募原稿枚数】 400字詰め縦書き原稿用紙95～105枚。
【締切】 毎年7月10日（当日消印有効）
【応募資格】 男女・年齢は問いませんが、新人に限ります。
【入選発表】 締切後の隔月刊誌Cobalt12月号誌上（および12月刊の文庫のチラシ誌上）。大賞入選作も同誌上に掲載。
【原稿宛先】 〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2－5－10（株）集英社
コバルト編集部「ノベル大賞」係
※なお、ノベル大賞の最終候補作は、読者審査員の審査によって選ばれる「ノベル大賞・読者大賞」（大賞入選作は正賞の楯と副賞50万円）の対象になります。

ロマン大賞

【応募原稿枚数】 400字詰め縦書き原稿用紙250～350枚。
【締切】 毎年1月10日（当日消印有効）
【応募資格】 男女・年齢・プロ・アマを問いません。
【入選発表】 締切後の隔月刊誌Cobalt8月号誌上（および8月刊の文庫のチラシ誌上）。大賞入選作はコバルト文庫で出版(その際には、集英社の規定に基づき、印税をお支払いいたします)。
【原稿宛先】 〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2－5－10（株）集英社
コバルト編集部「ロマン大賞」係

★応募に関するくわしい要項は隔月刊誌Cobalt（1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売)をごらんください。

9784086011242

ISBN978-4-08-601124-2

C0193 ¥438E

1920193004380

定価 本体438円＋税



コバルト文庫